

だから……」と言ふ半に、北小路が、「君、隠君。」

犠牲になつたのなら麗しいが、過つて戀愛といふ齒車に巻込まれて、這れるに這れられなく、犠牲にならなくては成らないやうに餘儀無くされたんですから……」

「我々も昔は君僕で談したものだ、何うだね？ 貴方なんて尊稱は舍さうでは無いか。」

北小路は黙つて頷いた。

「は、然うしませう！」と言つて、欽哉は凝と先方の目を見たが、「何うせ最り御承知の事だしそれにお話の出た次手だから……何うか僕の懺悔だと思つて聞いて下さい。僕は成程戀愛の犠牲になりました、然し貴方の……君の、認めて下さるやうに果して其れが誠だつたか、何うも自分ながら疑はしいので——君は昔から、一番僕の性質の缺點も弱點も知抜いて居られるから、包まず白状するが、僕は戀愛の爲めに獻身的になる事は何うしても出来なかつたのです。最無分別と言つたのも、敢て自意識を没した意味では無いので。情の誠から、自分で進んで

「だが、戀愛は終に誘惑ですな。然うして自意識の没しない……いや、没しられない僕見たやうな者でも、自我と衝突しいく、彌張犠牲になつたので……誰やらの辭に、戀愛は美しい夢を見て穢い事を爲るものと云ふ事があつたが、戀愛其物は美しいか知らないが、戀愛する事は、穢くないまでも儘に旨味です、誘惑されるんです！ 誘惑されて——何うでせう僕なんか、學校は歇めるし、家は棄てるし、自分の半生を全で犠牲にしてつて、戀愛の爲めに實に有らゆる勞苦を盡した。盡して何を得たかと

云ふに……皆無！」
「皆無と云ふ事は無い！ 戀愛を得て居るでは無いかね？」

「所が、得て居るのでは無い、得て了つたのです。今更氣が付いたやうに事新しく言ふのが愚ですが、戀愛は彌張美しい夢だつたです！ 今になつて僕は、何を希望し、何を目的に那樣に勞苦を忍んで、一生懸命に戀愛の爲めに努力したか不思議で成らんです！」

「然うか、二人は最り醒めたのか、儂いものだなあ！」と心に思ひながら、北小路は「戀愛は然し、戀愛其自身が希望なり目的なりでは無いのか知ら？」

「それは然うかも知れませんが！ けれど、那樣に努力し熱中して得た其の戀愛が、得て了ふと最り夢の覺めたやうで、何一つ後には残らない

んですからな！ 得たと云つた所で、物質的快樂の儂い満足より外に何にも無いので、單に其等の爲めに、是までの有らゆる勞苦を拂つたのかと思ふと、自分ながら呆れも爲るし、何たか欺かれたやうで腹が立つ。美しい夢だ、幻影に欺かれたのだと一口に言つて了へば、それは……言つて了へば……」と行詰る。

苛々しながら、稍伸びた髪毛を暴に横へ掻くと、欽哉は衝と椅子を立つた。縁側へ出て唾津を吐いて、其儘欄に靠れて外の景色に目を遣つた。

北小路は酔の早く顔へ出る方で、頸筋まで赤くなつて、酒の息で眼鏡も曇つて居る。片臂を「く」の字形に曲げて椅子の凭掛に載せ、横向に腰掛けて、紅緒の上草履を穿いたズボンの兩脚を入道に組みながら、意味有りげに其の背後姿

を眺めて居る。

「彌張幻影に過ぎないんでせうかな？」と程経つてから欽哉は言つた。體を這裏へ向變へて、「幻影の外に、何か未だ戀愛の實體と云ふやうなものも無いんでせうか？ 多くの戀する者は、單に那樣幻影を追つて狂奔するのでせうか？ 戀愛に對する人間の熱烈な欲求から云つても、幻影以上に最つと何か、價値あり意義あるものも有りさうに思はれるが……何う云ふものでせう？」

「然やうさ……と北小路も返事に困つて、「僕は何しろ、經驗が無いから。」と笑つて居る。

其れを見ると、欽哉も氣が付いたやうに急に赤くなつて、「何うも行らん事ばかり……相變らず僕は這慶事を言つてるかと思つて、君は可笑いでせう。」

「有難う！ 然やう言つて下さるのは實に知己の言で。ですが、北小路君、僕の苦悶は内部生活によりも、寧ろ外部生活にあるので……」

「外部生活とは？」北小路は何故か些つと遲つて、「究り……生活問題かね？」

「それも含まれるでせうが……恚うして僕も社會の一員として生存する以上は、何等か他を益したい、人間たる者の本分として、多少でも世中に貢獻する所が有りたう。君が然うして屹々として學問の爲めに盡してお居でになるのを見ると、僕は青年の修養時代を空費したのが残念でならない！ 行らん戀愛なぞに努力した勞苦で、學校の方でも引續き勉強して居たら、今頃は論文の一つぐらゐ發表して居たでせうに……」

「だから、是から遣れば可いでは無いか。學校なんぞ何うだつて、君は君の天稟の才能を發揮

「那樣事が有るものか！ 僕は熱心に聞いて居る。決して行らん事では無い！」と體を眞直に起して、外の者なら戀が醒めた、醒めたら爲方が無いで済して了ふ所だが、君は然うは行かない。何所までも思索的の傾向を捨てないで、其れには其れの、得心の行く丈の結論を擱まなければ止まないのだから、人よりは自然煩悶も多し代りに、又得る所も少くないのだ。僕もそれは、君の缺點の多い事も知つて居る、君の性格を決して圓滿とは思はない、けれど、缺點は誰しも免れない事で、各々の其れが個性なら爲方が無い。唯何う其れを自覺するかの問題で、君は缺點の多い代りには、其爲めに始終然うして痛切に苦悶も爲て居る。自意識の強い所爲でも有らうが、一つは其の思索的傾向の爲めで——君は到底内部生活の人だよ。」

「それは可い。青年の修養時代を戀愛の爲めに空費したと言つて君は残念がるが——僕は敢て空費とは思はないが、縦んば空費たつた所で、高三年か四年の運速では無いか。それに、僕なぞより一歳か二歳年も若かつた筈だし、是から新規に遣り直したつて前途は永い。僕は文學上の事には暗いけれど、それでもダンテの『神曲』やゲーテの『ファウスト』は、何れも五六十を越してから、死際に完成したものだと思つて居る……」

「けれど」と遮つて、欽哉は那邊邊歩き出して、「神曲」や「ファウスト」を例に取るのも僭上だけれど——何れも成程晩年の作には違無いが然しダンテは最う二十幾歳の時に、晩年の『神曲』を仄めかした『新生』と云ふ名高い詩があるさうです。ゲーテの『ファウスト』にも、『ウルフ

「アウスト」と云ふ若い頃の作があるが、是も随か二十代の作です。して見ると、一生の事業を完成爲やうとするには、青年時代から最り用意して懸らねば難いので。絶代の天才でさへ然うですもの、其の用意も思はずに、我々凡庸の徒が單に天才の晩年の成功のみを見て、其れを模倣爲やうと云ふのは、丁度メルヘンにある……」と其の物語を爲出した。

「……」と其の物語を爲出した。両手を兩脇に支込み、屹と胸を張つて廊下を往きつ還りつ爲ながら、昔ながらの博覽強記を振廻して、ダンテだのゲーテだのと言つて居る所を見ると、北小路も漫ろに高等學校時代の欽哉を思出さずには居られぬ。

「で、何とは無しに和りして君のやうに、然う自分で僣んで了つては爲やうが無い。ダンテもゲーテも戀愛家たる所は君と同じだから、君

も戀愛に由つて二人の天才のやうに向上するの

「……」と其の物語を爲出した。欽哉は唯苦笑して居たが、「僕も何も、強ひて僣り譯ちや有りませんが、何しろ何うも、健康は害して居るし、それに那いふ何で……言はば最り日蔭の何なのですから……」と口籠つて俛れた。

「何様、刑餘の身なのである！ 唯其れが破廉恥罪で無いから、欽哉の人格や才能に果無いやうに思つて北小路は談して居たのであるが、考へて見れば、社會は那樣に寛容では無い。それに、健康を害して居るとの事だが、彌張其れも刑期中の劇しい苦役が障つたのであらう體の不健康と共に心までも衰へたらしく、高等學校時代には街氣も有つた代りに、靦い才氣が逃つて、打てば響くと云つたやうな氣味々々

した青年だつたが、最り然ういふ僣は少しも見られぬ。昔は些つとした問題にも直ぐ乗地になつて酒々と歸したものだ、今でも水を向けると喋るには喋つても、何だか張合が無いやうで、調子も弾まぬし、言ふ事に第一熱が無い。尤も、學生時代は溢れるやうな希望を抱いて、自惚も強いし鼻息も荒い、誰しも意氣の揚つたものだが、今は失意の身——零落の欽哉である。言ふ事も恥と悔との自白であるから、話の弾まぬのも無理は無いので。

然し、其れにしても衰へたく僅か五六年の間に僣り果てたのを見ても、三年の處刑は肉體上にも精神上にも能くくの打撃だつたと見える。自分では青年で無いやうな事を言つて居るが、漸と未だ三十になつたか成らぬくらゐで、年から云つたら血氣の男盛であるのに、

餘程の最り長旅でも爲て来た人の如く、體の動作からして疲切つたやうにガツカリして居る。時々思出したやうに妙に苛々して見るが、直き又沈んで了つて、話を爲ながらも、心では始終何かクヨクヨして居るらしい。

「あゝ、此儘最り沈んで了らぬ此男の運命か?!」と然う思ひながら、北小路は凝と考へ込んだ。而して高等學校時代の連中を心に數へて見た。話は途絶えて、欽哉は獨り寂しさに欄に凭つたが、川風戦々と面を吹いて、荒れ涼んだ満目の風物は思有る身の心を惻ましむる。大利根の流は黄色に濁つて、天も海も灰色の沙曇、浪立騒ぐ川口の小島の黒く突立つた衆助綱の鐵柱に、白い鳥が二三羽、高く低く翔ち迷つて居る。一時に、佐藤と云ふ男は何う爲たらう?」思出したやうに北小路が言つた、「高等學校で一緒だ

つた佐藤福太郎——ね、君と慥か同郷だつたが
那の後消息を聞かないかね？」

「さあ……詳しい事は知りませんが……」と欽
哉は曖昧な事を言つて、「那の男も高等學校を舍
したのが墮落の元で、其後散々女で身を持崩し
た擧句が……妙ですな、今度は利慾の方へ走つ
て、金儲も可いが、何でも餘り質の好くない事
を爲て居るとか……」

「那の男がね？ 然う！ 分らないものだなあ？」
と嘆じた。

欽哉は元の椅子に歸つて、自分でビールを注
いで飲んで、苦さうに顔を歪めながら、「ですが、
佐藤や僕を除いたら、那頃の連中も皆最う立派
になつて居るでせう。」

「然やうさ——那頃我々が組織して居た緑會
の連中で、君と佐藤を除いたら、後は最う平凡

爲たかと思ふやうなのが多い！」

「ぢや、一概に佐藤ばかり悪くは言はれませ
な。」

「然うとも！ 佐藤は甚麽事を爲て居るか知ら
ないが、質の好くない事を云つたら、連中の内
にもなか／＼人に譲らないのが有る。だが、高
等學校時代の事を思ふと、それは十人十色で色
色だつたけれど、それでも豈かに今のやうに恥
を知らない者は一人も無かつた。それが揃ひも
揃つて皆然う變つて行くのだから……名々の罪
も有らうが、一つは生存競争上、餘儀無い現
社會の風潮かも知れない！」

「究り、社會と個人と、罪は兩方に有るんでせ
う。」と欽哉は又一口飲んで、「それに就けても、
忘られないのは高等學校時代ですな！」
「全く！」北小路は力を入れて同じた。

な徒ばかりだつたからね。平凡な丈に、一生懸
命にノオトを書き汚して、左に右に皆學士には
成つて居る。然し、那頃の心意氣が些とでも残
つて居さうな者は、恐く一人も無いやうだ！」

「君は、始終那の連中とお會ひですか？」

「會ふのは同窓會ぐらゐのもので、年に一二度
しか會はないが、それが、會ふ度び目に見えて
下劣になつて行くから驚く。悪摩をして答にも
稀にも慰らぬ奴も有れば、輕佻で浮薄で、見て
も胸の悪くなるやうな奴が有る、と思ふと、嚴
めしい口髭なぞ生しながら、相變らず親の金を
使つてノラクラ遊んで居るやうな無駄無しも有
る。中には又肺病で醫者に見放されて居て、そ
れで彌張圖書館へ通つてコツコツ何か遣つて居
るやうな感心なものも有る。が、然ういふのは例
外で、皆最う、這般人間が何の爲めに學問なぞ

「未だ中學時代は無我無中だし、と云つて、大
學へ入る頃になると、最りボツ／＼卒業後の事
なぞ考へたり爲るから、實世間を却て重く見過
ぐる。其所へ行つては高等學校時代で、自分の
信ずる理想——現實が何うであらうが、那樣事
には頼着無い、只唯理想に憧れて、理想に渴仰
して、信念も有れば勇氣も有る。單純な代りに
は眞率で、誠實で——那頃の事を思ふと、人の
事よりも、僕なんか實に自分で自分の今日が恥
しいやうです！」

「全く！ 那頃がお互に花たつたね。何の事は
無い、全で光明の中に泳いで居るやうで、自
分も、自分の周圍も、何所に一點暗い影と云ふ
ものが無かつた。感情は醇だし、意氣は壯だし、
世中に恐れるものも無ければ疑ふものも無い、
有らゆるものに好意を持つて、而して有らゆる

ものに敬意を拂ひ得られた、君の言ふ通り眞率で誠實で、究り眞面目だった。今日の皆は其の眞面目が無くなつて不眞面目になつたのだ！然し不思議なもので、那樣に皆變つて了つて居ても、何かの拍子に偶と高等學校時代の話が出ると、誰でも沁り眞面目になつて了ふ……と辭を切つて、強い短い髯を爪上げるやうに拵つて居たが、旋て飲半しのコップを取つてグツト北小路も飲んだ。

思出多い高等學校時代の話、二人も亦沁りとなつたので。曩から感慨の深い話ばかりで、つい興奮するまゝに知らず識らずコップを重ねて、一旦罷懸つた酔が再び發すると、酔は更に二人の情を切にするのであつた。北小路は溜息を附いて「連中は皆最う然うした社會の風潮に化せられて了つたが、然し我々

丈は、何うか緑會のあの心意氣を忘れたくないものだ！」

「全くですな！ 那頃の思想感情は何時までも夢に爲たくない!!」

「然ういふ緑會の殘黨も、最う二人限だから……」と言ひながら、ビールを兩方のコップに注足して「一つ健康を——緑會の爲めに我々二人の健康を祝して、さあ、一緒に一つ遣りませう。」

「遣りませう！」と目を輝かしながら、飲哉も勢よくコップを取掲げる。

「ブローヂット！」とコップを打合せて、泡立つビールを小氣味よく一緒に干した。

此の一杯で二人は悉皆酔つて了つて、何らも劣らぬ眞赤な顔を爲て椅子に靠掛つたまゝ、互に暫く酔も無かつた。それから、言合したやう

に澤の無い低い聲を頼はせながら、

丹波篠山男兒の囁よ、

親父は見よ毛が生えた。

よういゝ、でつかんしよ!

と身に沁むやうな調子で、昔一高で流つたデカシヨ節を小音に唄つたのである。

所へ、女中が上つて来て「あの、お連さんがお歸りなさいました。」

「あゝ、然うか。」と頷いた飲哉は、赤い顔を一つ撫でて「ちや、下で些つと待たして置いてくれ。」

「下で無くても、爰へ何したら？」と北小路。

「いや、最う然うしても居られまいから……」

「ちや、下である、お待ちなさいますやうに——はい。」と女中は下りて行く。

「最う何時でせう？」と飲哉が問くと、北小路

は例の銀時計を出して見て、「十二時二十分前——少し是は進めてあるから、發車には未だ三十分ばかりある。」

「ですが、ステエションまで些つと未だ有りますから、ポツポツ出掛けると爲ませう。久振でお目に懸つて、僕も近頃無く愉快でした！」

「僕も實に愉快だった！ ねえ君、舊友と云ふものは、お互に裝ふ所が無いから嬉しい！」

「其代り、行らん事を能く僕も喋りました。」

「お互に。だが、君とは昔から謎見たやうな事を始終言合つたもので、お互に能く論じたつねえ！ 一時は成程君の缺點ばかり目に付いた事もあつて、自然僕も疎々しくなつたけれどそれでも彌張君の事は忘られない。舊友も多勢有るが、何かに付けて思出すのは君で——前後に彌張君が一番思想上の友だった！」

彌張君が

「何うも……赤面の至りです！ 僕なんか到底も貴方なぞの……」

「僕なぞの？」と北小路は先方の顔を眺めて後の辭を待つたが、齒痒さうに「君は何故然うだらう！ 僕はその、君と比べたら幾らか順境かも知れない。華族とか何とか……名ばかりで一向實質も無いけれど、左に右に那様門地めいたものは有るし、それに、僕は物事大事を取る方だから——究り臆病なのだらうが——物事大事を取るから蹉跌も少ないし、随つてまあ大した失敗も無くて今日まで来たのだ。が、唯其丈のものでは無い。君よりも無難と云へば無難だが、未だ何等の價値も——人として何等の價値も發展して居ないのだから……」

「いや、僕なんか何うです。貴方が（何時か又貴方になつて）然うなら、僕は仍更……」と欽

哉の言ふのを遮つて、だからお互に是から發展して行くのさ。今も言ふ通り、緑會の殘黨も最う我々二人限だ！ 君も僕も思想上の蘭友と云つては外に無いのだから、ねえ、お互に最う疎遠しないやうに提挈して、而して、一緒に是から啓發し合つて進まうでは無いか！ で、君は健康を害して居ると云つたが、害して居るのは體ばかりでは有るまい。君は精神上的苦戦に疲れた今未だ敗兵なので、社會に又立つて行くにしても、心の其の疵傷が治るまでは暫く休養する必要がある。東京へ歸つて何うする考か知らないが、何の道休養中の體では不自由も多からうから、ねえ君、僕の所で用の足りる事なら、何なりと遠慮無く言つて来てくれ給へ！

ね、關君、君には北小路と云ふ友人のある事を忘れないやうに……可いかな。」

二人は心深い目と目を見交した。

「可いかな？ 關君。」と念を押すと、欽哉の目の底には光るものがあつて、「有難う！ お辭は決して忘れません!!」と感激して言つたが、徐ら椅子を立つた。

北小路も立つて、

「それで、東京は何處に今居るのかね？」

「今度歸つたら、何れ家でも持つ事になりませうが……」

と言つて、何故か答を躊躇したが、言はぬ譯にも行かぬので、家を持つまでは大塚の是々にと答へた。

「では、何れ東京でお目に懸らう。」

「は、何れ……」

欽哉は帽子を取つて、辭宴に暇乞を告げると、足早に二階を下りて行く。

北小路も下まで見送らうと思つて、階子段の下り口まで行つたが、下を覗いて見て、何と思つたか其處に佇んで了つた。間も無く、ガラ／＼と俥を挽出す音が二響續いて聞えて、最う一度覗いて見たが、頭を掉つて縁側へ出る。

關に靠れて、鬱陶しい川口の景色を見遣りながら、程經つてから「可哀さうな男だなあ！」と獨言ちた。

+

銚子から歸つた翌々日——二人が今度一緒になるに就いては植木屋の離屋でも困るから、狭くとも臺所の附いた一軒住居の貸家をと、欽哉が捜しに出掛けた其の後であつた。繁も着物を着更へて何所へか出支度を爲して居る所へ、思懸無い園枝が訪ねて來たので、母屋の上さんが慌

て、取次いで来た。

「まあ！ 何うして爰と分つたらう？」と繁は呆れる。

「でもね、貴方、被來ると直ぐ、關さんも御一緒ですわねつて——能く御存じのやうですよ。當にお結ひなすつて、赤さんをお抱きなすつて、本當にまあ、好い奥様にお成りなすつた事！ 私悉皆お見逸れ申して……ね、何時お嫁きなすつたんでせう？ 那麽最うお子様がお有りなされるんだが……彌張御養子でも遊ばしたんですか？」

「お上さん、まあ其れよりか、お待ちなすつて被居るでせうから……」

「え……ちや、這裏へ廻つて戴きますよ。」と上さんは母屋へ引返す。

繁は縁側を降りて、沓脱の穿物を引掛け、苗

木圍の間を急いで出迎へると、品の好い園枝の圓盤委が向ふの母屋から出て来て、這箇の姿を見ると、目鼻立の鮮かな白い顔が和り會釋を爲る。海老茶の風呂敷包を車夫に持たせて、自分で乳呑子を抱いた其の重みに、縮緬物らしい濕りした衣紋付の少し亂れたのが、恐しく媚いて見えたが、曇つては居ても外の明るい光を氣にして、自分の纏つて居たクリイム色のレイスのシヨオルを、片手で子の顔へ掩ひながら近づいた。

「まあ、能く何うも……」と赤い顔を爲て繁の方も近寄つたが、「おや、お坊ちゃんはお睡つて被居いますか？」と繁は、ま、お替り爲ませう。」と両手を出す。

「ちや、些いと替つて頂戴。何うも重くつて……」

「男のお子ですもの、何うしても違ひますわ。」と言ひながら、目を覺まさぬやうに靜に抱き取つた。

園枝は後毛を掻揚げて、葡萄酒のコツクリした鶉縮緬の羽織の衣紋を直すと、柳茶地の琥珀の帯がチラ／＼光線を受けて、セルカン織の雲形がオリイブ色に浮けて見える。持たして來た風呂敷包を受取つて、車夫は俵の所へ歸らせた。

二人は苗木圍を通つて離屋へ來ると、縁側に最上さんが待構へて居て、園枝が未だ座にも着かぬ内から、お愛でたいだの、御結構だのと慕無しに愛相を浴せ懸けて、肝心の繁は那邊除にされて居る。で、自分の膝にスヤ／＼小さい新を立て、睡つた幼子の、可愛い寐顔を黙つて見入つて居たが、何を思出したか、竊に溜息を洩らした。

園枝は氣が付いて「憚様、何うか這箇へ。」と言ふと、「いえ、可う御座いますよ、未だお睡つてはすから。」

「本當にまあ、お可愛いお坊ちやまで被居います事！ どれどれ、私に……」と上さんが横から掠取つて、「這箇にまあお太りなさいまして……彌張あの、ミルクでお育て遊ばすからで御座いませうねえ。」

「え……」何ういふ意味か、園枝も些つと腑に落ちぬらしかつたが、「乳が澤山ですから、牛乳は餘り用ゐませんの。」

「まあ、然りですか、能く其れで這箇にお太りなさいましてね。ちや、乳母やさんのお乳で？」
「いゝえ。」と微笑みながら「私の乳ばかりですの。」

「まあ！」

「お上さんは子が無いものだから……」と繁も微笑んで、「乳母なんかで育てるよりも、阿母様のお乳が、一番お子さんのお爲めに好いんですよ。」

「阿母様のお乳が？へえ、ミルクよりもね？」
母親が自分の乳を飲ませるなぞと云ふ事は、御身分格でも無いと思ふらしい上さんは、然るの綺阿召だと思つた園枝の着物も、能く見ると壁紙とか云ふ新機軸の銘掛地だし、心の内で、「彌張それぢや、旦那様は此節流りの學士とか薬師とか、屹度那樣所なんだよ。」

繁は漸々園枝に挨拶を済ました。
で、二人の間に話が始つたので、上さんも漸と氣を利かして、「お話の間、何うかお坊ちやまを私にお貸し下さいませよ、ね、宜しう御座います。」と自分で決めて、「あ、それから、結構な

お土産を頂戴爲ましたから、小野さんから何うか宜しく——ぢや、お坊ちやまをお借り申しますから、貴方、御緩りと……」と獨りで喋つて出て行く。

後で繁が、「何か頂戴物を爲ましたつて、何うも済みませんわねえ。」
「何有貴方、本の印なんですわ。」と言つて、園枝は故ら和りとして、「あの、安比古にお逢ひなすつたつてね？ 銚子で。」

「え……」と繁は赤くなる。
「今日ね、安比古から手紙が来て、それで始めて這箇に被居る事も知つたのよ。實はね、此間生家へ行つたら、貴方はお國へお歸りなすつたとかで、直き又出て被來るには被來るが、其の都合で暇を貰ひたいやうなお口振だつたつて、ね。義姉が然り言つて居ましたから、何か又

里の方に御心配な事でも出來たのぢや無いかと私、心配してましたの。」

「済みません……」と倦れながら、「何うも本當の事を申し上げ憎いものですから……ですが、何れ貴方には、お隠し爲ないで御相談する意りで居ましたに……」

「何にしても貴方、結構だわ！私、安比古の手紙を見ると飛んで來たの。」と獨りで喜んで、「貴方も苦勞なすつたけれど、でも、まあ、苦勞が有つたわねえ！」

「何ですか……何うもねえ……」と弾ませる。繁等二人の爲めに満腔の喜を表して來た園枝も、對手の其の様子に、何たか張合抜けが爲た。忘れて居た風呂敷包を開いて、水引の掛つた奉書包を取出したが、何うかお二人の御不慮にでもと言ふので。

「まあ、お上さんへも下すつた上、私達まで那樣……困りますわ！」と繁は當惑する。

「何です、清慮なさるやうな物ぢや無いわ。」と其品を傍の方へ押遣つて、「安比古から手紙でも言つて來ましたが、今度愈々御一緒にお成りなさるつてね。それに就いて、何か私の方で用の足りる事があつたら、何うか遠慮無く然り言つて下さるやうにね。」

「は、有難う。是までだつて随分遠慮無しに、御厄介ばかりお願ひしたんですから……」

それだから、此上御厄介にならぬと云ふのか？何にしても氣乗のせぬ様子を變に思つて、園枝は美しい眉を顰めて見たが、「あの、何は何うなすつて？ お留守？」
「え、お午から些つと出まして……家を捜しに參つたのですが、最う歸りませう。」

「家を？ 然う。何の邊へお持ちなさるの？」
「何所でも可いんですが、まあ此の近周囲が静
で好からうかと思ひまして。」

「おや、最う見付かり次第、お持ちなさる事に
決つたんですね？」

「え、まあ其の意りなんですけれど……」と
繁は口籠つて、「それよりも、お邸の御都合が

——お暇を戴けるか戴けないか、其れからまあ
伺つて見ません事には何ですか、今日實は、
是から小石川へ伺はうと思つて居ましたの。」

「あ、それで、お出懸先だつたんですね。」と頷
いて、「都合なんか何うだつて、外の場合と違ひ
ますもの。貴方が譯を言つて暇をくれと被仰れ
ば、義姉だつて喜んで應じますわ。」

「でも……ね。」と又俯いて了つたので、園枝は
暫く其れを眺めて居たが、「小野さん。」と改めて

になるおや有りませんか、ね、小野さん。」と思
入つた氣色で一膝乗出したが、「それとも、人に
は談せない事？」

「お談するも爲ないも、那樣、譯の何のと取留
つた事は無いんですから……氣が進むも進まな
いも、何の道今度は一緒になる意りで、最う家
まで扱して居るくらゐなんですから……」

「おや、其の意りで扱して被居るんだが、氣が
彌張進まないんですね？」と清しい目をパツチ
リ見張る。

「ですが、家を持つて一緒になるつて事は、私
が却て言出したくからぬんですが……」と自分
でも自分の心が分らぬもの、如く、繁は頭へ手
を遣つて、花月巻のピンを抜いたり挿したり爲
て居たが、旋て思ふ所へ挿込むと言つた、「ねえ、
貴方、結婚と云ふものも、幾らか那れは好奇心

呼んだ。

「え、。」と面を擡げて、慌てゝ目を逸らすと、
獨言のやうに、「お上さんは、お尿に氣が付けば
可いかな……」

「那樣、小兒の事なんか何うでも可くつてよ。
それよりも小野さん、貴方何だか變だわ！ 何
うなすつたの？」

「變と云つて……何う？ 貴方。」

「だつて變だわ！ 散々苦勞なすつて、漸と思
が届いたのだから、甚麽にか喜んで被居るたら
うと思つて來て見りや、何だか貴方は氣が進ま
ないやうな……變なんですもの、ね。屹度何か
譯が有るんでせう？」

「……」
「屹度然うだわ。甚麽事か知らないけれど、談
して差支無い事なら談して頂戴よ。私だつて氣

が手傳ふから樂みで……ですから、兩方未だ希
しい内に早く爲て了はないと、段々氣が抜けて
何だか充たなくなりませうわね。」

「そら、彌張然うだよ！ 變だと思つたわ。」と
園枝は心に領きながら、「那樣貴方、不健全な
考持つちや爲やうが無いわ。那して永い間親
しくなすつて、兩方で氣心も知合つて、而して

思合つて御一緒になるんですもの、理想的の結
婚ちや有りませんか。私なんか御覽なさいよ、
氣質も甚麽だか能く知らなかつたし、無論變な
んてものは——這麼事を今言ふのは何だけれど

貴方は知つてる通り些とも其れは無かつたし、
……有る譯も無いんだが——唯父や兄に強ひら
れて、全で自分の意志なんて無しに結婚したん
ですから、それから見れば、貴方なんか實に幸
福よ！」

「幸福？ まあ！取んでも無いと云つた顔を爲て、何が幸福ですか知ら？ 貴方はそれは、御結婚なさるまでは然うだつたでせうけれど、御結婚後は何うですか？ 那麽お睦しい家庭で……貴方こそ幸福で被居る癖に——理想的と云ふのは貴方の家庭の事だわ。」

「あら、私は家庭の事を言つてや爲ないわ。家庭と結婚と、貴方混じて居るのよ。」

「だつて貴方、結婚の不幸は、結婚後の家庭にあるぢやありませんか？」

「だから、貴方は混じて居るのよ。結婚は結婚、家庭は家庭——別だわ。私の所の家庭が理想的だとか幸福だとか被仰るけれど、其れは獨い此の一年ばかり這方の事で、それまでは始終不平等ばかりだつたのよ。其内に小兒が出来たり何か爲て、此節はまあ幸福……と云ふのか、左に右

く家庭は圓滿だけれど、若し其れが、那麽形式的結婚で無くつて貴方のやうに自由意志の結婚だつたら、ね、始めから不平なんか無かつたらうし、最つと幸福だつたに違無いわ。」

「まあ！其上に——貴方は慾張つて被居るよ。」と繁は寂しげに微笑む。

園枝は大眞面目でういゝえ、慾張つて居や爲ない事よ。恚うして貴方、自分でも漸とまあ不平の無くなるまでと云ふものは、其れまでの私の煩悶は一通りぢや無かつたんですから……今だから私も言ふけれど……」

始め、父や兄に強ひられて、言はるゝまゝに北小路へ嫁いた當座は、單に名ばかりの北小路夫人であつて、園枝は何うしても妻たり家婦たる心持になれなかつた。自分の意志でも無い形式的結婚に、最う生涯の自由を縛られたのだ

と思ふと情無く、絶えず心の底で其の束縛を道れたいやうな氣が爲て成らなかつた。と云つて束縛を道れて何う爲るといふ取留つて考の有るでは無く、唯籠の鳥が青空を望む如くに、當も無く憧れて居た。

其内に、北小路は社會主義の視察の爲めに自費で洋行して、其の留守中、今の大久保の邸が新築されるまで、園枝は一時生家へ歸つて居た事があつた。其時は最う父の尙徳は亡くなつて居たし、兄の速男は國府臺の砲兵隊附で家には居なかつたし、言はゞ獨身同様の自由な境界であつた。所が、然うして一時でも束縛を道れて、日頃望んだ其の自由を得て見ると、妙なもので、園枝は今まで感じなかつた大いなる責任を感じて來た。妻たるものゝ責任——自分が其れまで始終當も無く憧れて居た心の動搖も、最

う其の責任を感じる心を動かす事は出来なかつたので、究り渴望して居た自由も得られて見ると、其の自由を我儘勝手には濫用出来ないものだと思つたのである。

で、團朝の夫を迎へて、大久保の新邸へ引移つてからは園枝も心から、北小路の妻たり家婦たる服従と制限とに甘じて、始めて今日の圓滿なる家庭を作り得られたと云ふ事を談して、尾ひに……ですが、服従と云つても、自分は自分で丁と最う自由意志も持つて、而して妻と云ふ制限を甘じて受けて居るのだから、前のやうに意志も何にも無い奴隷的の屈従とは違つてよ、言はゞ自由の服従だから……それは家庭の主婦なんでもものは、何うしても自由を束縛され勝て窮屈なものには違無いけれど、でも又、自分の責任や義務を感じて見ると、家庭の爲めに死し

やうと云ふ氣も發つて、其の不自由な中に彌張
慰籍も有るわ！ え、希望だつて有るわ！」
然う云ふ園枝の目は美しく輝いて、其の輝きに
熱さるゝやうに暈が仄と紅色潮して、顔も鮮も
活々と鮮いて見えた。

自由の服従！ 其れは園枝の兄の連男が昔か
らの主張である。丁と自由意志を持つた上に、
或る制限を甘じて受けること云ふ事は、軍隊教育
を受けた連男の躬ら保持する主義で、此の自由
の服従は、旋て日本の軍人と婦人とが、世界に
誇るべき美德だと言つて居るので。

「悉皆最う——お兄さんの感化だよ！」と然う
思つて、繁は心に微笑みながら、「貴方の被仰る
やうだと、何も自由意志の結婚が幸福とは決つ
て居ないでせう。一時はそれは、不平がお有り
なすつたとしても、然うして最う圓滿な家庭を

を渡して下さりますが、私達も是から家庭を作つた

つて、甚麽希望が有るんでせう？」

「甚麽希望つて、貴方達は元々相愛して結婚な
さるんだし……おや、切か知ら？」と辭半ばに
園枝は耳聳てる。

と見ると、威勢よく泣き腕く子を両手に持飾
しながら、上さんが眞赤な顔を爲て苗木圃を來
るので、繁が急いで縁先に立出ると、上さんの
背後に附いて飲哉の來るのが見えた。

「おや、歸つて來ました。」

「然う！ 關さんが？」と園枝も立つて來たが
泣く子を先づ渡されて、飲哉に挨拶する間も無
かつた。

繁が、「お尿は？」お上さん。」

「お尿？ え、今し方爲すつたばかりで……
いえね、お尿は大人で被居つたんですけど、今

作つて、希望も有れば慰籍も有ると被仰るのだ

から、それに越した永久の幸福は有りませんわ。
私も、以前考へて居たやうに然う何うも、人間
は我儘勝手に自由ばかり得られるものぢや無い
と思ひますから、況て家庭なんか、自分一人で
出來てるものでは無し、或る度合までは、是非
服従も譲歩も必要だと思ひますけれど……然し
ね、貴方、自由の服従だつて、貴方のやうに彌
張希望が無くちや出來や爲させんわ。」

「私のやうに希望つて？ 家庭の希望？」

「はあ。」

園枝は凝と其顔を見詰めて、「貴方は、ぢや、
家庭を作つても希望が無いから、それで結婚が
充らないんですか？」

「え、……私私に充らないと言つたのは、
那れは其の意味ぢや無いんですが……」と溜息

ね……」

「僕が門口で文したのだから……」と飲哉は
苦笑を爲ながら、帽子を片手に縁を上つた。

飲哉も園枝も實に四五年振であるが、互の消
息は絶えず繁を通して聞いて居るので、慙うし
て突然會つても、那様に久振のやうな氣が爲な
かつた。然し、心身共に衰へた飲哉の變りやう
と、其の反對に園枝の立勝つた奥様振とは、一
目に其れと兩方で感じたので、殊に娘の頃は稍
太り突であつた園枝も、子を生んだ所爲か、姿
形が何所と無くスツキリ水際立つて、花ならば
先づ花菖蒲の白輪。強ひて取繕はぬ内に、自
ら子爵夫人の品位は其の花の匂ふ如くに仄めく
のである。

で、子に乳を食ませながら、漸う飲哉に挨拶
は爲たが、何れも妙な具合で、辭慕な白けて

了ふ。繁は茶を淹更へて二人に薦めた。
「まあ、大きな目を開いて了つて……」と獨言
ちた園枝は、綱穂無さに泣きもせぬ子を賺して
居る。

昔思へば、互に戀らしいものも芽萌まうとし
た仲で——いや、園枝の方は可成芽萌んでも居
たので——其れは霜に遭つた細芽の如く枯れる
とも無く失せては了つたが、今は最り女も人の
母となつたし、男は男で可い加減に臺が立つて
了つたし、慙うなつて會つて見ると、有繁に昔
可懐しいやうな、さて味氣無い心持も爲るので
ある。

白でヌーボー式の縫取を爲た薄紫紺の半襟を
擱けて、温い玉を延べたやうな園枝の胸乳に、
子は直りと吸付いて、然も健かさうにグビグ
吭を鳴らしながら、其の若い美しい母乳に育た

の足音に偶と顔を擧げて、

「園枝さんは歸つたかね？」

「え、お伸が待たせて有りました。」

「然りのやうだつたね。」と頷いて、「子持になつ
たつて事は繁さんにも聞いて居たが、那して自
分で小兒を抱いてるのを見ると、何だか不思議
なやうな氣が爲る。」

「不思議つて、何も不思議は無いちやありません
んか？」と繁は微笑む。

「けれど、那裏に最り可愛くなつて……何時生
れたんです？」

「つい先達で誕生だつたんですから、慥か那れ
は、昨年の秋お生れなすつたのでせう。」

「それが、最り那裏だから……」

「ですか、速男さんのお坊ちゃんはまだ最つと
お可愛いんですよ。園枝さんよりも御結婚は後

鈴張の目をクル／＼させて居たが、漸ら其れで
も細目になつて行く。が、機を見て密と乳首を
放さうと爲ると、子は又急々と吸出すので。眞
綿細工のやうな括れた小さい手で、夢心地に乳房
を捕へて居る。

其の可愛らしい様を、繁と共に餘念無く見入
つて居た飲哉が、旋て感に堪へかねた調子で、

「お可愛いでせうなあ！」

「え。」と包切れぬやうに園枝は和りしながら
婀娜な笑顔を繁の方へ振向けて言つた。「曩のお
話ね、貴方だつて可愛いのが出来て御覽なさ
い、それこそ、何よりの希望だわ！」

十一

園枝を門まで送出して置いて、繁は離屋へ歸
つて來ると、獨り物思に沈んで居た飲哉が、其

だつたけれど、直ぐ其年にお出来なすつたもの
だから、今丁度片言なんか被仰つて、甚麼にお
可愛いでせう！」と言ふと、俄に氣が付いたや
うに「然う／＼、餘り遅くならない内に、私も
お邸へ行つて來ませう。」と白の匹田入の薄小豆
の帯揚げを結び直す。

「すると、速男君の子は幾歳なんですか？」

「速男さんのお坊ちゃんですか。」栗梅地の山道
崩しの米澤一樂の被風に手を通し懸けて、「全お
二歳と少しですが、今最り可愛い盛りです
わ。」

「然うでせうなあ！」と太息のやうに言つて、「僕
等も何だと……ねえ繁さん、今年最り三歳にな
るのだ！」

「三歳に？」

繁は色を變へて、血も冷たくなつたやうに固

くなつて了つた。被風が肩を滑つて、羽二重絞の朱鷺色裏がパツと畳の上に戻つた。

所へ、印半纏の爲事着を着た宿の亭主が、苗木園を廻つて来て、其所の縁先から行成の家が見付かりましたか？」

「家？」と欽哉は那箇を見向いて、「何うも思はしいのが見當らなくて、今日は無駄足して歸つて来た。」

「ぢや、何うです？ つい此の植物園の前に、今丁度引越爲てるんだが……」

一軒立て、間敷が是々、家賃が幾らで、庭が、井戸がと事細かく並べて、「……如何にも恰好な家だから、私も慌吃つてお知らせに來たんで。何うです？ 最う直き引越して了ふから、後で些つと見に來なすつたら。」

「然うとね……」と氣の乗らぬ返事を爲したが、

を見て、レースの縁取になつた蘭色縮緬のシヨオルをピンで留めながら、左に右へ行つて來ますわ。那して園枝さんも被來つたし、歸つた事が分つて居るのに、何時までも顔出し爲ないのも何ですから。」

それも然うだと云ふので、結局行く事に決つた。繁は蝙蝠傘に駒下駄——雨の用意に毎もの吾妻草履は歇めて、疊附の澤消しの塗臺に織模様の鼻緒、雪のやうな白足袋に、勝色絹の袴がシト／＼踵を打つて、丈の湛りした被風の袖も詰れば、赤い色の僅に入口を零る、背後姿、欽哉は黙然と見送つて居たが、苗木園の横の多行松の蔭に隠れて、腕で木戸を開けて表へ出た氣勢に、最う一度天模様を見て、而して障子を閉めて入つた。

偶と實際に押違つてあつた奉書包が目につい

自分でも心付いて、「是非見に行かう。故々何うも御苦勞でした。」

「ぢや、最う些つと経つたら來て御覽なさい。植物園の前で、那邊へ行きや直ぐ知れるから。」と言置いて、亭主は立去る。

と、急に繁が、「左に右へ私行つて來ませう。」と手早く被風を端被つた。

「何所へ？ 小石川ですか？」と欽哉は其顔を見遣つたが、青い色を爲て、常とは何たか變つて居るので、「今日に限つた事も無いでせう。直き最う四時ですよ。」

「え……でも、支度を爲ましたから。」と兩手に穿めたミット入の黒の長手袋を扱揚げる。

欽哉は縁へ出て天模様を見て、「それに、降りさうぢや無いかね。」

「行つて來る内ぐらゐる大丈夫でせう。」と繁も外

たので、何氣無く中身を引出して見ると、「福井本場」と摺込んだ文庫紙に包まれて、白の奉書袖が一匹。絹物とは思つたが、品は欽哉に分らぬので、其儘元に收めて、包紙に書いた「北こうち」の四字に目を留めた。假名交りに書いたのは主からで無く、園枝自身の贈物と云ふ意味だらう？ 北小路夫人——然かも最う子爵家の若様の母である。

「儂い男女の關係よりも……然う、君子の關係は最些と意味が深い！」と呟いた欽哉は、其儘轉りと横になつた目を閉ぢた。

それから可成過ぎて、障子を閉切つた部屋の中の稍薄暗くなり懸つた頃、母屋の上さんが夕飯の支度の前に、疊園枝に出した茶道具を下げに來て見て、「おや、貴方もお出ましたとばかり思つてましたのに、まあ被居つたんですか？」

聲懸けられて、欽哉は始めて我に返つたやうに起直つて、薄暗くなつた邊を見廻す。

「然う云や貴方、内のが曇、植物園前とかに空家があるつて知らしに來たでせう！」

「あゝ然う——然うだつた！」

「見に被來いませんの？」

「悉皆忘れて居た。」

「見に被來るなら、早く被來らないと暗くなりませよ！」と上さんの聲は辰巳振り。

「ぢや、見て來やう。」とノツソリ立つた。

欽哉は帽子も冠らず、ブラリと楠木屋を出たが、曇つて居ても外は未だ明るい。場末の町の人通稀に、落葉の溜つた下水溝に付いて横町へ曲つて、兩側立木の茂つたダラ／＼坂を下りながら、偶と行手を見送つた。

氷川の森の籠り黒く叢立つた岡は、所斑に

色付いて、淡く霧が被つて居る。其中の一段小高くなつた裾に、黄や橙や、遠目にも暖い色の明るく際立つたのは氷川神社の崖で、傾斜の急な細い石段が眞立に見える。坂を下りて、其所の新開町の外れを右へ曲ると植物園前に入るのを、反對に欽哉は左へ取つて、氷川神社の鳥居前へ出たのである。

遠くで見たほどに鮮かでは無いが、木も草も叢濃に紅葉した崖の石段を登つて、神社の境内へ入ると、昔ながらに能く手入の届いた庭は、狹隘しく屹ちんと片付いては居るが、人無き神前の深として何所か有繫に秋閉びて居る。崖際の繪馬堂へ入つて、砂塗れの縁に腰を下すと、堂の屋根一杯に枝を張つた樺の葉が、風も無いのにハラ／＼ハラ／＼と寂しい音を立て、今頻なしに舞ひ落ちる。其の落葉の間から、今

は最う一面の人家になつた崖下を眺めて、欽哉は町行く人々の忙ない姿を仄やり見て居た。「いや、恚うしちや居られんのだ！」程經つてから氣が付いたやうに、愕然面を擧げると、「何だつけ？ 然り、家を見に行くのか……いや、然うぢや無かつた。」

眉を蹙めながら、何か索むるやうな目を爲て町の向ふの高臺を見遣つた。低く灰色に覆つた曇天の下に、嚴めしく聳つた官立學校の建物の左寄の手に、芝の黄ろくなつた小高い土堤があつて、其上にチヨコナンと一軒、小さい洒落れた二階家が見える。何時だつたか、其二階に仄やり明の射したのが恐しく風情があつて、何所かで明笛の鳴つて居た事があるやうに覺える……

「それは春の晩だつた！」と漸う思當ると、爰

の境内で、樂と行末懸けて戀を嘗合つた其夜の事が胸に浮んで、「其れは然し、儂く醒めた……然う／＼、儂い男女の戀愛よりも、其男女の間に不用意に生れる子と云ふものゝ問題だつた！」其の問題を考へねば成らなかつたのだと、欽哉は始めて心付いた。

「不用意に生れて、然かも其れは意味が深い！ それ程意味深いものを、人は何故始めに不用意のだらう？」縁を立つて、靜に土間の内を歩き出したが、屹と引結んだ口元をビク／＼神経的に顫はせながら、常の欽哉とは見違へるほど沈痛な面色になつた。折々立留つては、凝と宙を見詰めた其目が力無く下目に伏すと、又コツ／＼歩き出す。恚うして時計の振子の如くに那邊行き這邊行き同じ土間の片隅を何時までも機械的に動いて居

だが、旋てガツカリして腰を下した。

日射の見えぬ曇天の何時暮れるとも無く暮れて行つて、繪馬堂の中は人面も離々しいまで暗くなつた。堂の腰羽目に片臂寄せて頭を載せて身動もせずに考込んで居た欽哉が、思餘つたやうにホツと太息を附いて面を擡げた時には、崖下一面に仄と夕霧立籠めて、町には最りチラチラ明が點き初めた。何時の間にか境内の神前にも御明が上つて居る。

夕風ザワ／＼と梢を騒がせて、落葉の散る事頻りに、欽哉は酔の醒際のやうにゾク／＼する。氣が付くと、羽織も着ずに居るので、薄着の襟を掻合せながら立懸けたが、些つと又考へて獨言ちた、「全然不用意とは言へない。戀愛其物が旋て子と云ふ新箇人の觀念變動で——究り新箇人といふ觀念が、プラトンの所謂現象界に實現

せんとする其自身の熱烈な渴求、其れを我々は

戀愛の熱情として感じ、且つ努力するのだ！」境内を後に、仄暗い石段を足探りに拾ひ降りて、店明の疎な新開町へ出ると、門の硝子障子に一品料理と書いた新店の餉屋が目に入つた。未だ夕飯前の欽哉は、曩から空腹を感じて居たので、衝い入る氣になつて、豚種の料理と、一杯賣の氣の抜けたビールの後で、何と思つたか、常には嗜まぬウキスキイを小さいコップに三杯まで飲んだ。勘定を拂つて出るまでは然程でも無かつたが、少し行く内に酔が蘇と發して、足元もフラ／＼する。

楠木屋の亭主は爲事から歸つたまゝの装で、眞暗な天候様を見い／＼、庭の鉢物など精々と庇内へ取入れて居たが、欽哉の姿を見ると、「今夜は一暴れ寄来しますぞ！」此間から溢つて

居たが、到頭本物になつて來やがつた……何うでしたね？ 家は。」

「家？ 欽哉は何の事か思出せぬらしかつたが、「あ、家か？ 家はまあ……些つと持つのも考物だ……」と答へた。呂律も纏れて、グラ／＼首を掉りながら離屋の方へ行く。

「先生お造酒てるな。」と然う思ひながら、亭主は和やりとして、それから大きな聲で、酒を買つて來るのを忘れちや居ねえかと、亭所の女房に注意する。

欽哉は離屋の沓脱に穿物脱捨て、上ると、其儘明を點けるのも億劫で、直ぐ其所へ倒れて了つた。

幾時間睡つたか、旋て目が覺めた時には、ランプも細目に點つて居て、掻巻が消せ被けてあつた。其れは母屋の上さんの深切だらう、繁に

未だ歸つた様子も無いので、開いて行つた其の懷中時計を見ると、夜は最り十一時半。欽哉は酔醒の渴に絶か湯沸の水を呷つて、目も冴え頭も瞭りした所で、起直つて更に又黙想を續けた。亭主の見込みに違はず、外は漸り暴模様になつて、庭木を採立てながら横暴吹く雨！ 風！

十二

夜一夜暴通した雨風は、明方になつてバツタリ鎖つた。

下町の方では床まで水の浸いた所もあつて、崖が崩れたり、烟突や電柱の倒れたのも少なく無いさうで、今朝早く出入先を見舞に行つた母屋の亭主が見て來ての話。其れに比べると、山手の方は一帯に靜であつた。垣が毀れたり、立木が折れたぐらゐの損害ではあるが、何しろ楠

木屋は草木が籠んで居るので、挿木は流れる。苗は根拔にされる、足の踏場も無いほど荒れた。屋敷隣の銀杏の太木も綺麗に葉を震落されて這箇の界内へ一面に黄色く散つて居る。庭の所所小川の迹を見るやうに土が洗ひ流されて、小石が美しく掘出された。木羽の飛んで来たのや、植木鉢の引繰返つたのが、落葉や折枝と一緒に垣の根方へ吹寄せられて、烏瓜の赤い實が水脈になつて潰れて居る。天はケロリと晴れて、暢氣さうな朝日の影がキラ／＼縁の下まで射込んで、狼藉たる地上の濡色の片端から乾上るのが土の匂と一緒に湯気でも立つやう。日射の届かぬ露深い草蔭に、虫が一尾腹々に啼残つて居る。明々と日は射しても、朝未だ早い晩秋の氣は冷々／＼肌沁むので、欽哉は縮入羽織を引被けて、端近く日向ぼこりでも爲て居るやうに、荒

果てた庭の心細げな虫の音に凝と聞入つた。那のまゝ昨夜から起續けて居るので、顔色も悪く目もドンヨリして居るが、頭は清々しいほど瞭りして、努めて寐やうとしても眠られぬのである。折角待ち明したものだから、小野さんのお歸りまで辛抱して居て、貴方の實意を見せてお上げなさいと上さんに譯はれたが、欽哉は唯苦笑を爲て居た。

繁が漸う歸つて来たのは九時頃であつた。昨日這箇を出た時の装とは違つて、秩父銘撰の綿入に、黝んだ黄八丈の仕立返しの書生羽織、それにシヨールも盛めて、手には婦婦傘を持つた丈。暇を買つて次手に自分の荷物も持つて来る筈で出掛けたのが、恚うして仄やり手振で歸つて来たので、欽哉も不審さうに見迎へた。「何うも済みませんでした……」繁は小聲に然

う言つて、縁側の端の方へ傘を擱くと、其處から窃り上る。「大分緩りでしたね？」と欽哉は始めて辭を懸けた。「え……済みません」と繰返して、「早くお暇戴いて歸らうと思ひましても、色々何で……其内に恐しい吹降になつたものですから、つい、あの……何うも済みませんでした！」と、何は……と庭の方を向いたまゝ、暇は貰へなかつたんですか？」「いえ……貰へないんぢやありませんけれど……」と口籠つて、凝と縁側の男の背中を見て「私の方で實は、言出すのを見合せたんですの。」「何うして？」と欽哉は怪訝さうに那箇を振向く。「何うも言出せないんですもの。だつてね、奥

様は此間内の那の厭な大氣で、此の二三日お體が本當で無くつて被居る所へ、生憎又お勤向の御用で速男さんはお留守だし、其處へお附けに乳母やが、親元に不幸があつて急に退つたものですから、奥様は私の歸るのを待ちかねて被居つたんですわ。ですから、無理に引留める譯にも行かないけれど、切めて乳母の代りが来るまでも、何うかお客に來た意りで泊つて居てくれと、那樣に被仰るんでせう。それでもとは私も言ひかねて……ね。それに坊ちゃんも私の顔を見ると、最う甚腰にか喜んで——不斷から尤も、私には一番懐いて被居るんですが、昨夜なんか何うしても、私と一緒に無きやゝ賑らないんですもの。」「可愛いさね、小兒てものは。」と感心したやうに頷く。

「可愛いって貴方、外の者ぢや何う嫌しても駄目なのが、私が抱いて寝ると、弗り泣くのも黙つて了つて、出も爲ない乳を舐り〜お睡るんですもの、お可愛いぢや有りませんか！ 私と一緒に寝て居る内に、何だか自分の子のやうな気が爲て……」と太息を呟く。

歛哉は黙つて先方の顔を打成つて居たが、何にも言はずに又頷いた。

「繁も何か未だ言はうと爲たけれど、自分を見詰めた其の目を見ると、心怯の爲たやうに顔を背向けて、おや、掃除は未だなんですかね？」で、縁側の端の見切の壁に掛つた箆を取りに立つと、歛哉が「掃除はまあ後でも可いから……それよりも今の話だが、究り繁さんに今出られぢや困るから、最う少しの間居てくれと、恠う向ふで言ふんですか？」

「え、」と男の顔色を讀むやうに、「それも、外の事なら何ですけれど、何しろ坊ぢやんが……小兒は全く頭は無いですからね、私も何うも断りやうが無くつて……」

「然うさ。それを又無理に断つたら、乳母は居ないんだし、然ぞ向ふでも困るでせう。」

「それは最う、お困りなさるに決つてますわ。今朝だつて貴方、何でも私に附いて行かうつてお泣きななさるものだから、皆して最う、騙すのに困切つた位なんですから。」

「それで、繁さんは一體何うする意りなんです？」と改つて聞いた。

「さあ……何う爲ませう？ 貴方さへ辛抱して居て下されば……」と言憎さうに口を切つて、「切めて乳母の代りが来るまで、私も、私居て上げたいと然う思ふんですが……」

「僕が辛抱すると云つて、何を？ 一緒になる事ですか？」

「え、家まで最う捜したんですし、今更見合せると云ふのも何だか気が抜けますし、それに、當分又お獨りぢや貴方が御不自由でせうが……」

「けれど、未だ何も適當な家が見付かつたのぢや無いから、見合す分には差支は無い。」

「ぢや、昨日あの、爰の何が知らしてくれた植物業前とかの家は、それは駄目でしたの？」

「いや、見に行かうと思つて出掛けるには出掛けたが、途中少し考が變つて、家の方は見合せたのです。」と漸う縁側を立つて来て、貴方が

「速男君の小兒が可愛くつて、其爲めに一緒に居るの見合さう……いや、まあお聞きなさい。貴方の其考は無論、愛い情から來たのだし、

僕も又冷たい理智で判斷するやうだけれど、左に右く子と云ふものに由つて、或ひは同じ歸着に一致したかも知れないので……」

歛哉は座に着いて、傍に有つた巻簾を燃らしながら語り續けた。昨日繁が出掛けた後で氷川神社へ行き、其所で考へた事から、昨夜夜中に起きて、それから朝まで獨想した一部始終を談すと、繁が「道理で、お顔の色がお悪いと思ひましたわ。で、何うお考へなすつたの？」

「今談しますが……何か又、漢として空論でも弄ぶやうに取られぢや困るから、豫め断つて置くが、僕だつて最う煩瑣な事を言つて、自分で舌の動くのを喜んでた時代とは違ふから、何か議論と思はないで、僕の新しい信仰だと思つて眞面目に聞いて下さい。尤も、僕の創見でも獨斷でも無い、皆最うシヨペンハウエルあた

「可愛いって貴方、外の者ぢや何う嫌しても駄目なのが、私が抱いて寝ると、弗り泣くのも黙つて了つて、出も爲ない乳を舐り〜お睡るんですもの、お可愛いぢや有りませんか！ 私と一緒に寝て居る内に、何だか自分の子のやうな気が爲て……」と太息を呟く。

歛哉は黙つて先方の顔を打成つて居たが、何にも言はずに又頷いた。

「繁も何か未だ言はうと爲たけれど、自分を見詰めた其の目を見ると、心怯の爲たやうに顔を背向けて、おや、掃除は未だなんですかね？」で、縁側の端の見切の壁に掛つた箆を取りに立つと、歛哉が「掃除はまあ後でも可いから……それよりも今の話だが、究り繁さんに今出られぢや困るから、最う少しの間居てくれと、恠う向ふで言ふんですか？」

「僕が辛抱すると云つて、何を？ 一緒になる事ですか？」

「え、家まで最う捜したんですし、今更見合せると云ふのも何だか気が抜けますし、それに、當分又お獨りぢや貴方が御不自由でせうが……」

「けれど、未だ何も適當な家が見付かつたのぢや無いから、見合す分には差支は無い。」

りの先哲が言ひ古した事だけれど、恚うして又自分の實際問題に觸れて見ると、一層其れが切實に感ずるので。究り戀とか愛とか色々言つても、男女の關係は終に生殖より外には無い、子と云ふもの以外に、戀愛の意義も目的も無いと云ふのです！」

「レプロダクシオン？」繁は些つと首を傾げたが、サツと頬を染めた。

「で、是は強ち僕ばかりでは無い、貴方だつて——それは明かに意識されて居ないかも知れないが、お互に恚う……何か心で求めて居る。昔の心持に若返らう、若返つて戀に酔はう、最う一度昔のやうな戀を燃さうと望んで居るのだが何うも其れが弾んで来ない。一緒になつて家庭を作らうと云ふのも、或ひは然うでも爲たら、望むやうな、戀も再燃するかと思つて……ね

繁さんも恐く然うなんでせう。けれど、其れは實東無いと思ひますよ。彌生銚子行と同じで、到底失望に終るだらうと思ふですよ。」

「然う、何うして？」と訊ねて見る。
「何うしてつて、お互に最う戀は終つたのですもの、終つて目的を果して了つたのですもの。男女の關係は單に生殖で、生殖即ち子と云ふものが戀愛の目的だとすると、僕等は既に其の目的を果して了つて居るぢや有りませんかね。尤も此の……生殖慾と云ふものは本能的作用で、誰にしたつて豫め意識して子を設けるものは無い。目的を果したと云つても、其れは不用意に果したので、敢て果さうと思つて果したので無いから自身には氣も付かない。氣が付かないから、何か最つと戀愛に由つて得やう得やうと望んで居た——然う、全く然うなんで

す！ 些つと考へると、お互に唯、最う一度昔のやうな戀を得やうと望んでたやうに思はれるけれど、其實戀を得たいのでは無く、今までは最つと何か戀の或物を得たいと望んでたのぢや無いですか知ら？ 究り戀の目的なり意義なりを捉へたいと欲したので……然し、其の目的も意義も速うに済んで了つて居た！」と欽哉は頭を掉つた。

繁は話の意味が瞭り分らぬので、黙つて其顔を見て居る。

「それを、今日まで僕は氣が付かなかつた！」と辭を續けて、「だから、僕も實に迷つたのです！ 貴方にしろ僕にしろ、是まで随分戀の爲めには高い價を拂つて居る。僕なんか何らかと云ふと血の冷たい人間で、戀を爲ながらも彌生自我や利己が附纏つて居て、自分でも始終其れ

を淺しく感じて居たのだが、今になつて考へて見ると、是で彌生人並の熱情は燃して居た。それは自分で進んで犠牲になつたのでは無いかも知れぬが、自然の結果が彌生犠牲にもなり没我にもなつて、戀故に自分の半生も葬つて居る。半生を葬つて、希望も失へば目的も棄てる、那樣にまでして左に右に戀の爲めには努力した。いや、左に右とか何とか煮切らぬ事を口では言ふものの、然し其の當時の心持では、有らゆる快樂も幸福も、二人の間の戀を描いては他に無かつた。だからこそ、其難儀も苦勞も厭はなかつたので……(此つと考へて)それで、僕の迷つたと云ふのは——此間北小路君とも談した事だが……」

それ程勞苦を忍んで努力して得た戀も、得て見ると實に夢の覺めたやうで、露骨な言方だが

單に肉慾上の満足を得た外には、顧みて自己の快樂の上に何等の結果も残らぬのに呆れる。二人の間の何に更へても熱中した戀も、今となつては全く豫期に反して、寧ろ得ない前の方が幸福だつたやうにも思はれる。で、強ち自分のみでは無く、多くの戀する人が、那樣覺易い夢見たやうなものに欺かれて狂奔するのが不思議でならぬ。我々が戀に對する熱烈な慾求から考へても、最つと何か價値あり意義あるものも有りさうに思はれる。肉慾上の些々たる快樂や満足が、豈に戀の希望なり目的なりでは有るまい……

と思つて迷つたのは、未だ自分が徹底しなかつたので、戀は彌張肉慾の満足に外ならぬ。最も言ふ通り、生殖即ち其の目的なのであつた。恚う言ふと、如何にも戀愛の神聖と高尚とを故

らに卑しくするやうであるが、實は然らず！生殖と云ふ事は、生存の慾望と共に最も強大な力であつて、第二の我、次代の簡人が是に由つて支配されるのである。で、戀愛其物は一種の方便に過ぎなくて、男女の關係の眞意義は色慾であり、生殖である其の證據には、人は戀し合ふのみで決して満足せぬ、戀する所の戀人を獨占し得て始めて満足するので、單に愛情の交換のみで無く、愛情の結合、即ち肉慾上の満足を得なければ駄目なぬのを見ても分る。覺易い夢のやうな、單に美しい一時の感情の爲めに、人が有らゆる勞苦を忍ぶと思ふと不思議だが、種族の保存、次代の人間を産出する爲めだと解すると、我々が戀の爲めに努力するのも始めて意義がある。

所で、次に起る疑問は、それ程深大な意義を

何故我々は意識せぬのだらう？ 其の重要な目的に對して人は何故不用意だらう？ 其を解釋するには、何うしても形而上の詮議を待たねば成らぬので。要するに戀も、哲學上所謂宇宙の觀念とか、種の意志とか、實在の或る大なる力に支配されるものであらう。で、生殖と云ふ事は敢て簡人の要求では無く、全人類に關する種族保存の目的——宇宙の要求であつて、各簡人は其の全人類の大目的を果す爲めには大に努力も要する。子孫と云ふ人類の大切な繼續者を完成さす爲めには、或ひは自己を全く犠牲に供せねば成らぬ必要もある。其所で、自然は我々を欺くに戀愛といふ美しい幻影を與へるので、此の幻影に惑はされたる簡人は、其實、種の爲めに努力しつゝあることを、然も己れ自身の快樂幸福の爲めである如くに感じて、喜んで努力し、

好んで勞苦も爲る。一體人間には、他の動物の如き本能といふものは殆ど無いやうに思はるゝが、(初生兒は左に右に)唯色慾のみは争ふべからざる本能で、其れは種の要求を目的として簡人を指導する所の本能である。我々人間の利己的たるや、種の其の目的の爲めに必然的熱心を以て、言換へれば己れ自身の快樂幸福を犠牲にしてまでも努力するのを好まぬ所から、自然は然ういふ色慾の本能を能へたので、其の本能は我々の意志を動かす爲めに、更に戀愛と云ふ美しい幻影を成して現はれるので。然れば總ての戀する者は、只管己れ自身の快樂の爲めである如くに思ひつゝ、動くが、其の目的の果された後は、最早や種の手から解放される爲めに、随つて幻影も失せ、其所に始めて欺かれたるを覺るのである。究り、

戀愛の實相は色慾の本能であつて、此本能の欲求の満足は、單に種の目的の爲めに存するのであるから、其の満足は決して箇人の意識内に入るものではない。我々が戀愛の目的に對して無意識であり、生殖と云ふ事に就いて不用意なのも此故で……と欽哉は論じた。

自分でも斷つて居る通り、無論其は欽哉の創見ではあるまい。種の大意志——根本意志を以て解釋しやうと爲るのを見ても、何様シヨベンハウエルあたりから得たものではあらうが、然し其れは只の學理では無い、欽哉の信仰で——哲學者の學說を受賣して、空に論議を遣つて居るのでは無く、焦る形而上の解決でも待たなければ、今の自分が救はれぬのである。強ひても其れを信仰して、而して今の悔恨から脱しやうと願つて居るのである。

意識の無い、劣等な動物ほど本能に支配されるので、究り目的を解しないものを、目的に向はしむべく自然は本能を與へたので……然し、人間の色慾の本能は、劣等な動物のやうに正さら目的を解しないでも無いやうだが、其代り他の動物と違つて利己的だから、其の利己を欺く爲めに、今も言ふ通り本能の上へ最う一重戀愛といふ幻影を植付ける。幻影に欺かれて、戀愛其物に然も目的があるやうに誤解して、戀愛の根本義である所の生殖と云ふ眞の目的を、却て人は避けたがる——我々が其の例です！」

「ねえ、然うでせう。我々は本能の目的に背いて生殖を避けた、いや、種の意志に悖つて次代の新箇人を滅した！ 究り戀愛の幻影に欺かれて、戀愛の眞意義を誤つたのです！ ねえ。是

で、言ふ事にも自ら熱誠が籠つて、繁も身に沁みて傾倒せずには居られなかつた。固より大掴みな論で、籠入つた形而上の理窟を半ば感情的に吐露するのであるから、何うも臆りと呑込めぬ所はあるが、其の力ある論案は強く胸を打つ。自分も同じやうに迷つて居た事なので、是まで曖昧だつた心脈の曇りが拭はれるやう。黙つて傾倒しながら幾度も繁は頷いたが、其の頷く度びに、自分の身を絡んだ目に見えぬ煩ひの糸が、一筋づつ解けて行く如くに思はれた。

欽哉は新しい巻頁に火を付けて、其れを吸ひながら暫く考へて居たが、「其の本能ですな」と吸半しを直ぐ灰へ突挿して、「本能と云ふものは傍から見ると、然も何か自分で目的を定めて、其の目的の概念に由つて動くやうに見えるが、決して然うでは無いので、本能は無意識的ですよ。

も彌張利己の所爲でせう！」と深い溜息を吐いて、「繰返し言ふやうだが、戀愛の眞意義眞目的は、決して覺易い一時の感情で無い、次代の間——子孫と云ふ將來に繼續する永久のものです！ 戀愛の欲求が他の有らゆる慾望に比べて最も熱烈なもの、我々の眞性が不死不滅に活きんとするからで……あゝ、然し、我々の其の眞性に逆らつて、我と我手に不滅の靈を滅した！」と言つて、青い顔を爲て欽哉は口を噤んだ。

繁はハンケチを目に當て、俯いて居るので。油氣の無い束髪の洋銀のピンがスリト抜けて縁端に射込む明るい日影にキラリ光つて、音も無く疊に落ちた。暫く啼喚んで居た庭の隅の蟲の音が、冷々と又聞えて来て、話も途絶えた二人の間の今戸燒の箱火鉢に、巻頁の殻が細々と燻つて居る。

「利己と云や、僕なんか……」と言懸けて飲哉は煙に咽せて、其の煙り殻を火箸で取除けて、何か又運つたが、「いや、何うせ最も次手だから言つて了ひますが、繁さんも氣を悪く爲ないで聞いて下さい。蠱も、自分で進んで犠牲になつたのでは無いと言つたが、實際僕は戀すら獻身的になれない人間なので、半生を葬つたとか、やれ犠牲に供したとか言ふと殊勝らしいが、其れは餘儀無くされたので、決して自分自身の本心からでは無い。現に刑期中でも然うです、何う最う腕いたつて爲方が無いと知りつゝ、彌張何うも諦める事が出来なくて——深く運命に服従すると云ふ事は、何うしても僕には出来ないのです！ 愆うして罪を背負つて、自分獨り犠牲になつたのだから、出たらば、是非此の犠牲になつた報酬を貴方から得やうと云ふ念が、始

終絶えなかつたもので……究り其れが、僕の獻身的になれない、淺しい利己なんです！ で、報酬と云つた所で、先づまあ結婚して貰ふより外に貴方から酬いられやうも無い、だから僕も今度出て來ると、直ぐ其の相談を爲たやうな譯で……正直な所、最う僕の血は冷めて居る！ 結婚を望んだのは愛でも戀でも無く、言はゞ漠然たる一種の報酬を望んだのでした！」
繁は又頷いた。
「私も、實は……」と始めて口を開いて「結婚でも爲なければ、貴方が永い間那して何なすつたのに、私も濟まないやうな氣が爲ましたものですから……」
「然うですか？ 貴方も。」と厭な顔を爲る。
「それで、究り貴方は何うなさるお考ですか？」と繁は固唾を呑む。

「愆う解決が付いて見れば、お互に最う心の残る所も無いから、寧ろ何うです？ 奇麗に別れやうぢや有りませんか。」
「え！」有緊に驚いて、「別れるんですか？ まあ！」
「まあ何も無いぢや有りませんか。」と飲哉は肩を聳して、
「別れるのが自然でせう、其位の事は貴方だつて承知してる辭に……那樣もう、愛想めいた事を言ふのはお互に舍しませう。」と皮肉に言はれて、繁も其儘俯れて了ふ。
「で、僕と違つて、繁さんは立派に獨立自活の出来る資格を持つてるんだから、其點は何も困りは爲ないでせう。却て僕のやうな日蔭者と一緒によりも、其の方が身の振方も付け易い。貴方さへ今のまゝで居れば、香浦の方も無論望む所

でせうから、然うすりや速男君だつて、園枝さんだつて悪いやうには爲ないでせう。其内には又、相當の人でも見立てゝ、結婚するなり何うなり……」
「いゝえ」と遮つて「私、もう然うなれば、立派に獨身で通しますわ！」と善ふやうに繁は言つたが、ハラ／＼と涙が零れた。
暫くしてから「私の事よりも、貴方はそれで……貴方は何うなさるの？」と濡れた目で飲哉の顔を見詰める。
「僕ですか？ 僕は爲方が無いから、田舎へでも退込まうと思ふんです。」と聲は沈んで「何うも然うした方が一番可さうです。這様に體は衰弱して居るし、それに、當分まあ社會へも顔出し出来ない身の上なんですから、何も恥を忍んで、住み慣れ都會に沈淪して居る事もない！」

「田舎へ退込むと被仰つて、では、あの、御養家の方へ……？」

「いや、養家へなぞ、今更歸れるものですか！と固く首を掉つて、歸れば尾張の實家の方です實家の兄の方には、田だか畑だか、父が分けてくれた僕の分が少しばかり有る筈だから、其れでも貰つて、傍ら小學校の教師の口でも捜して、何うか、敗殘の餘生を平和な田舎で葬りたいと思ひます！」

有鑿に欽哉の其の目は涙に潤んだ。繁も耐らずなつて、ハンケチで面を掩つて了つた。

晴かな秋の日射に、美男蔓の黒い肉厚の葉がキラ／＼光つた生垣の向ふで、餌を拾つて居た雀がバツと翔つと、其所へ母屋の亭主が現れた。今まで圃の荒後を片付けて居たので、土塗れの手に、一枚の端書を密と指の先で抓んで来る。

んで聞かせて、苦笑を爲て、利かん氣の年寄だから、僕に當付けて寄來したのでさ。だが、まあ可い、然う身が決つて下れれば、僕も郷里へ歸るに歸り可い。」

然し、欽哉の心は一層寂しかつた。

十三

十一月三日、天長節の旗日へ持つて來て、今度同盟國から遙々來訪された國賓の歓迎で、東京市の夜は、花火と提燈とイルミネーションとで輝き光つた。殊に下町方面の番方と云ふものは、町毎に軒飾を競ひ、家毎に趣向を凝らし、て、『歓迎』の二字と、"Welcome"の語とが、有らゆる物と、有らゆる形と、而して有らゆる色と光とで現はされた。

店明、絃、軒燈や廣告火や、電車の柱燈の

「何？ 郵便かね？」と欽哉が先づ見付けて懸ける。

「え、貴方の所へ。」と庭先へ入つて來た亭主は手にした端書を欽哉に渡しながら、繁の方を偷見て、怪訝さうに出て行く。

「關松尾——何たらう？」表の差出名を見て、欽哉は不審さうに端書を裏返したが、口の内で二三行讀むと、「お、愈よ決つたと見える！ 佐藤を養子に爲るさうだ。」

出抜けで、繁は何の事か解せぬらしく、端書を持つた男の其の手元を黙つて見て居る。

一通り讀み終つてから「養家のお母から寄來したのだが、え、と……御前様にも色々御迷惑な思をお爲せ申し候所、捨てる神あれば助ける神も之有り、今度佐藤の福太郎殿を房の養子に相定め申候間、御安心下されたく……」と讀

常さへ目紛しい所へ、更に軒毎の提燈と、惜氣も無く飾り點した電氣と瓦斯と、大通は然ながら光の海である。宵の口の一盛、人は頬を打つて此の明るい廣い巷を埋めた。

歓迎會の式場歸りと見えて、胸に微草を下げた、シルクハットのフロツクコートや羽織袴や、それから白襟紋附の婦人なども交つて、左右の歩道をゾロ／＼と水の流るゝやうに群集が續くので、多數の警官は目印の提燈を振照しながら、往來の停滞せぬやう彌喧しく人立を制する。中には、白毛の前立を立てた正帽の軍人の歸營を急ぐのや、今日の催しを知らぬ顔に、津足歸りの學生が紅葉の枝を擔いで行くのも見受けられたが、一番目に立つのは、國賓の坐乗された同盟國軍艦の水兵である。歓迎の記念に貰つた小さな國旗を手に手に、三人五人

と群をなしつゝ、何れも新橋ステーションへと引揚げて行くので、行逢ふ群集が萬歳の聲は町的那邊這邊で絶えず聞かされて居る。車道の兩側には一間置に色電氣を懸けて、遠く見ると、丁度南京玉の紐を張渡したやうな中を、五色のイルミネーションに包まれた花電車が見え、何れも何れも満員の札を掲げて誇然と通つて居る。是も亦色電氣で飾つた各停留所の電柱の下には、其の満員の上へ更に乗込さうと群めく群集、乗せまいと遮る車掌と車臺の乗客、全で喧嘩のやうな騒ぎの中を潜つて、辛く這るゝ如くに降りたのは欽哉と繁である。

「いや、實に大變だ！」と欽哉は片手に提げたヅツクの鞆を持更へて、「那麼窮屈な思を爲るより、歩いた方が餘程楽だ。」

「ですが、」と繁は衣紋を直しながら、

「何う爲さいますか？ 今電車の中で談話したのが本當なら、今夜最う十時ので無きや、直行は無いやうぢや有りませんか？」

「本當か知ら？ 然し其れにしても、亭主が先に待つてゐるだらうから、左に右に新橋まで行つて見ませう。」

亭主と云ふのは楠木屋の其れで、下町の賑ひを見物旁、欽哉の見送を兼ねて、新橋ステーションへ先に行つて居る筈。欽哉は今夜愈も國へ歸る事に決めたのである。

明るい人込の中を縫ふやうに爲て、二人は新橋の方へと取つたが、「何うでせう！ 此のま出人出は。是ちや話も陸に出来や爲ないわ。」と繁がこぼす。

「でも、電車の中よりや可いでさ。」

「電車の中と云や」と思出したやうに、「若

いハイカラ男と一緒に乗つて居た人ね——私がお辭儀を爲した女の人、貴方覚えて被居つて？」

「いや、知りません。」

「御存知ありませんかねえ、貴方一度お遇ひなすつた事があるのに。そら、ズツと以前に、上野の演奏會へ御一緒に行つた事が有りますでせう、那時池之端の洋食店で出會した、那の二宮と云ふ人ですよ。」

欽哉は小首を拵つて、「二宮？ 然うでしたかね？」

「そら、二宮節子と云つて、學校の私、舎監に會つたぢや有りませんか？ 那時に。」

「然う——！ 那樣事がありましたね。」と漸う思出した。

「那時の舎監ですよ、今の人が。」

「然うですか。那麼に若かつたですかね？ 僕

は最つと深けてたやうに記憶して居るが……」

「那時最三十三三だつたんですから、彼是四十近くでせうよ。夫が若いものだから、それで那樣若作りを爲るんでせう。」

「夫が出来たんですね？」

「え、一緒に乗つてた、那のハイカラ男が然うなのよ。」

「那の若い男が？」と呆れたが、「一體男は何者ですか？」

「何でも婦人雑誌の記者とかで、クリスチャンですつて。」

「クリスチャンの婦人雑誌記者に、女學校の舎監、好い配偶ですか。」

「ですから、嫌はれないやうに、那若作りを爲てるんでせうよ。」繁は突當る人を避けて傍へ離れたが、直ぐ又寄つて、「ですが、那になつ

て、那麼若い男と一緒になるなんて気が知れないぢや有りませんか。那の爲めに學校の方も可けなくなるし、今では何でも女學生なんか預つて、素人下宿のやうな事をしてるつて話ですが……那れまで辛抱したんですから、獨身で最う通したら可さうなものです、ねえ貴方。」

「さあ……何ういふものですか……」と欽哉は足を留めた。
球燈やら萬國旗やらを蜘蛛手に張渡した杉の葉の大アーチに、電氣の文字が赤くなつたり青くなつたり、色々に光の變るのを人集りが爲て居るので、欽哉は些つと立留つて眉を顰めたが、アーチの方へは目も與れず、群集の背後を廻つて行手へ出る。繁も剣くれぬやうに後に附いて少し行つた四辻で又、丁度式場から引揚げる接待の藝者達が、揃ひの首付で、多勢花を貰い

たやうになつて通を横切るのに出遭つたが、其れにも二人は目を與れなかつた。二宮の話から二人の戀の未だ新らしかつた其の當時の、思出多い昔を、欽哉も繁も、同じやうに追懐しつゝ歩いて居るので。

春の夜の月無き闇を、世界は唯二人、裏若い戀に憧れながら、不忍池畔を夢心地に漫歩した其時の楽しい思出！ 其れを追懐しながら、此の明るい賑かな巷を、今は戀も破れた二人が青春の歡樂から覺めて、互に最う孤獨の身を、僅に其所まで送りつ送られつして心寂しく行く。行く先は、更に又新しい別離の涙である。
「獨身も然し、考へものですか。曩の話に還つて、思出したやうに欽哉は然う言つた。繁さんだつて獨身主義だつたけれど、彌張其れは行はれなかつた……」

「ですが、私は最う、屹度是从ら獨身で通して見ますわ！ 恁うして貴方(貴方)に力を入れて」と、お別れするからには。」

繁の答は何うやら當付けたやう。
「すると、僕さへ無かつたら、繁さんも最初から獨身主義を通したんですね？」と苦笑を爲た欽哉は、通り懸つた店先の明るい飾窓の白熱瓦斯の影に、女の其の青い横顔を見ると、急に苛し出して「然うだ！ 全く僕が繁さんの主義を破らせたので——繁さんの健氣な主義を破らせて、究り僕が、純潔な貴方を誘惑したんだ！ ね、然うでせう？」
「ですが……」と繁も返事に困つて「貴方は、でも、私の獨身主義に、同情は爲すつて被居つたわね。」
「仍可けない！ 獨身主義に同情し、賛成を爲

て、夫を持つな、然し戀は爲ろ——夫は持たなくても可いが男を持たないのは女の自然に背く！ 那樣やうな事を眞面目になつて言つたのだ。何といふ無恥の言でせう！ 是が誘惑で無かつて何でせう！ 今考へても、僕は實に恥づるのです！」と我にも無く調子が高きつたが、擦違ふ人の振返るのを凝と耽返し、溜息を吐いて「彌張何うも……眞面目に貴方と結婚する氣なんか始めから僕には無かつたものと見える！」と力無げに言つて、欽哉は手にした靴を持更る。

「私、些と持ちませう。」と繁が手を出すのを、「何有、可いですが……だが繁さん、僕は成程結婚する氣はなかつたか知らないが、其れだからと云つて、豈か貴方を一時の弄物に爲やうなんて、那樣憎むべき了簡では決して無かつたんですから、其丈は何うか誤解しないやうに……」

僕が誘惑々々と言ふから、或ひは那樣風に取れ
 たか知らないが……然う又取るべきが至當だが
 然し僕は、何も彼も最う打明けて了つて居るの
 だから——綺麗に打明けて了つて、而して爽り
 した氣持になつてお別しやうと思つてゐるんだか
 ら……お別して了へば、最うそれで二度と貴方
 に遇はれやうとも思はんし、此期になつて何も
 自分の非を飾らうとは爲ません！ 矛盾のやう
 だけれど、僕は決して貴方を弄んだのでは無
 い、眞心から貴方を戀したのは事實ですよ！
 「それは、私たつて知つてますわ。」
 「然うですか、それなら僕も満足だが……」と
 暫く黙つて歩いたが、「此間銀子でも然う言ひま
 したね、僕は夫婦といふ社會上道徳上の責任
 を恐れて、それで結婚を避けたのだ。だから、
 繁さんの獨身主義を不自然と知りつゝも、結婚

を避ける爲めに其を贊同したのだつて、ね。」
 「えい。」
 「社會上道徳上の責任を恐れた——無論それ
 もあるが、實際白狀すると、繁さんと那れまで
 になつて居ながら、彌張何うも、養家の方に心
 が残つて居て、それで一つは貴方と結婚する氣
 に成れなかつたのでせう。」
 「心が残つて被居つたと云つて、では、あの、
 許嫁の方に……？」と問返した繁の聲は、有聲
 に不快らしかつた。
 欽哉は帽子を些つと冠り直して、「それも何で
 すが……僕も養家の方を纏いで置けば、何かに
 便宜だし、豈か佐藤のやうに財産や家柄ばかり
 目當に爲ないまでも、世の中を渡るのに、言は
 ば風波を凌ぐ安全な港を控へて居る譯ですから
 な。一時はそれは、養家の手前なぞ何でも無い

と云ふ氣になつたが、それでも彌張許嫁を棄て
 るのは濟まない……のでは無い、惜しいやうな
 氣が爲て、始終然ういふ利害の打算を頭に持つ
 て居た！ やれ養子ほど不條理なものはない、
 やれ許嫁は不自然だ、箇性を無視するの、人格
 を滅すのと、貴方を捉へちや能く不平や苦痛を
 訴へたものだ。だが、僕は那樣に果して苦痛を
 感じて居たらうか？ 自分ながら何うも那頃の
 心持は能く分らんので……何しろ言ふ事が皆誇
 張だつたのは事實です！ 貴方の同情を引かん
 爲めに、強ひて煩悶を大業に振廻したやうな覺
 が無いでも無い。が、まあ那樣事は何ちにして
 も、僕が結婚を避けたり、獨身主義を贊同した
 り爲た眞意は、全く養家に對する未練が内々残
 つて居たからで……と口籠つたが、「いや、這麼
 事を聞いたら然ぞ貴方も不快でせう！ けれど

……最う其も過去の事で、那通り許嫁の身も決
 るし、養家とは全分僕も縁の切れたものだから、
 切めて其れで、繁さんも何うか恕して下さい！
 僕には最う港と云ふものは無いのです！ 港を
 失つた難破船です！ 實家の方と云つても、是
 も腹達の兄で餘り頼みにもならないし、田舎へ
 退込んで、果して望通りの平和が得られれば僕
 倅なので……」
 人通りが劇しいので、折々聲の紛れる事もあ
 つたが、可成身近く寄添ひながら、繁も涙含ん
 で聞いて居た。
 「關さん」と暫くしてから、「最う那樣、過去つ
 た事は被仰るなよ！ 何も貴方ばかりが悪いの
 ぢや無いわ、私だつ彌張結婚する氣なんか無か
 つたんですから……ですが、私も好い藥になり
 ました！ 獨身とか何とか口では言つて居ても

一向未だ世の鹽も嘗めない若い考だつたんで
すもの、那の時分の主義が常になるものですか。
ですから、一度は懲うした苦い経験も嘗めて見
るのが業ですわ。ええ、全く好い業になりまし
た！もう、其處誘惑にも負けは爲ません！
と辭清しく言放つて、是から私、始めて清淨
な獨身主義に入るのです！

「繁さん、堪忍して下さい！」と欽哉は行成先
方の手を握り緊めた、街燈の火影に凝と顔を見
遣つて、清淨な獨身なんて、若い貴方に、那
様寂しい決心をさせたのも皆僕の罪です！赦
して下さい！」

「ええ、私の事よりか、貴方こそ孤獨で、此先
其處にお寂しいんでせう！」

「然う。貴方も寂しいが、僕も寂しい！」
二人は立留つて了つて、互に見合せた目と目

が同じやうに涙で光つた。

凄しい花火の音に喫驚して、二人は思はず手
を放した。何時の間にか新橋の橋詰へ出たので
振仰くと、日比谷で打揚げる花火が開いて散つ
て、星となつて降るのが爰からは眞面に見える。
橋詰を左へ曲ると、最りステエジョン前の廣場
で、横濱へ引揚げる外國水兵の見送り團體が輝
輝と詰懸けて居る。見渡す限り人の頭で眞黒に
なつた中から、旗や高張提灯がスク／＼と立ち
續いて、萬歳の聲が遙にステエジョンの構内か
ら湧き起ると、其れが堤を切つた洪水のやうに
ドツと廣場一面へ漲渡る。其の高鳴る潮の如
き人の海の中へ、欽哉等二人の姿も旋て紛れて
見えなくなる。

十四

「然うか、時間の都合で横須賀行のに乗つたん
だね？ ぢや、爰から又直行に乗繼んだ——直
行は何時に來るんか知ら？」

「新橋を十時に出るから、爰へは十二時少し前
でせう？」

「それぢや、最り間も無い。久振ぢやあるし、
それに話のやうぢや何時又會へるか知れんから
何所か此の、印ばかりでも別盃が酌みたいと思
ふんだが……」と外套の釦を外して、ポケット
の、袂時計を探りながら、「今何時か知ら？」

欽哉は暗い驛路の向ふの、事務室の外に掛つ
た大時計を見遣つて、「最り十一時です。」

「十一時——十一時ぢや爲方が無い。」

「君は然し、今度の汽車は何時です？」
「曇の外に、東京行は最り十二時過ぎしか無い」
「那樣に遅くなるんですか？ それぢや何うも

……氣毒な事を爲ましたな。」

「僕は何有に、最り用務も済んで歸るんだから、
何なら爰で一泊するばかりさ。」

「で、横須賀へは彌張り軍隊の用務で？」

「軍隊の用務で、横須賀の要塞砲兵へね。」

「要塞砲兵へ。」と頷いて、欽哉は今更らしく對
手を見た。
香浦速男も今は最り大尉である。眞深に冠つ
たカーキ色の軍帽の下から、太い眉、黒い顔、
カイゼル風の濃い眼鏡、髭まで、越々たる好武
官のタイプが具つた。肩の廣い丈高い體に、緋
の袖章の入つた黒の外套、裾を渡る、軍刀の長
い鞘が冷く光つて、動く度に長靴を打つては
ガチャリと鳴る。

田舎の小停車場の夜深！ 薄暗い吹風しのブ
ラットホオムに、永待して居る旅客の心持ほど

佻しいものは有るまい。青の横筋の中へ白く「おほふな」と抜いた、六角形の釣ランブが仄やり邊を照して、狭い冷い腰掛には、曇稿を渡つて這邊へ来た旅商人風の男と、是は獨り近くで降りるらしい子持の女とが、暗い影に黙然と下り汽車を待つて居る。線路の向ふの事務室、其の丈は有繫に明るいガラス窓の中から、折々寢惚けたやうな話聲や欠の聲が聞える。上り汽車の乗客は向ふの其のプラットホームで待合すのだが、那裏には未だ人影も無い。

欽哉は腰掛の端の方に、ツツクの靴を膝へ載せて寒さうに貧乏揺を爲て居る。速男の方は立つたり腰掛けたり、始終動きながら話を爲て居るので。

「君は然う言ふが、到底も歸つたつて永く居られや爲んよ、直き又出て来る！」と又腰掛を放

れて言ふ。

「出て来たつて最う爲方が無いですもの。僕のやうな敗卒が、二度と又都會の劇しい戰場へ引返したつて、何になるのですか！」

「いや、敗卒と言ふと行らんが、君は此の、疵を負つた落武者なんだから、傷さへ癒えりや屹度又奮起つて還無い。」

「駄目ですな、到底も那樣自信は有りません。惹ひ那樣事を思つて、及ばん望を何時までも抱いて居るよりも、小學教師なり、何なり、敗卒は敗卒相應な爲事を見付けて、田舎で最う果てた方が平和でせう。」と欽哉の聲は有繫に曇つた。

速男は何とも言はずに、仄暗い其顔を眺めたが、軍刀の皮緒を一振り揺揚げると、兩手をポケットに突込んで大跨に歩き出す。向ふの事務

室でコツ／＼電信機械の鳴出したのが、深とした構内を手に取る如くに響く。

旋て靴音高く直と立留ると「君は然し、餘りに其れぢや躬ら輕んじ過ぎるものぢや無いかね君ほどの俊才が、田舎の小學教師なんかで果てやうてのは、國家の此の、人才適用の上にも不經濟な話だ！」

欽哉は寂しい微笑を洩らして「僕自身も、以前は那樣やうな自惚を持つて居たものだが……」「いや、然うぢや無い！」と力有る聲で遮つて「決して自惚ぢや無い、自信だ！ 以前の君は強い自信と、それから此の……何と云ふか、究り理想に向つて不斷の向上心を燃して居た、其點は毎も僕は敬服して居たので。大砲打つ事と酒飲む事より、考の無い僕のやうな者でも、君に會つて君の話を聞く、其度び何か此の……今

まで知らなかつた新しいものを捉まされるやうで、僕は心竊に兄事して居たものだ。那頃の君の學殖、それから君の才能、ね、其等を埋没さして了ふて事は、君自身惜しいと思はんかい？」と辭が粗雑になつて、「ええ、關君、君はそれから、那頃の君の那の激しい情熱！ 那れは何所へ押落して了つたんだい？」

「……………」

「那頃の學殖と才能、それから激しい君の情熱！」と速男は熱心に語り續けて「お世辭でも阿諛でも無い、那頃の君は、僕も全く畏敬して居たものだ。だから、小野なんかの事でも……僕内々那の女を妻に貰ひたいとまで思つたくらいなんだが……」と浮り言つて、弗と口を噤む。

欽哉は思はず顔を見舉げた。

で、熱心の餘り獨り那樣事まで口を滑らして、

ハツと気が付いたが、其儘後を言はなかつたら却て髪に取られるも知れぬので、速男は徐ら腰掛に腰を下すと、白い手袋の手で顔中撫廻しながら、「いや、何も今更隠す事は無い——白状するが、實は那樣念も有つたんだ。所が、僕の意は通らずに、君と那いふ事になつた、僕も有罪に失望は爲たやうなもの、然し怨みは爲んかつた！粗大僕如き者の配ぢや無い、君を選んだのは彌張此の目が高いと感心したくらので。日頃畏敬する君丈に、僕も深く諦めて、而して満腔の好意を持つて君等の幸福を祈つた！ね、那の當時君等二人の爲めに、多少僕が盡した事は認めてくれるだらう？」

「速男君！」と欽哉の聲は感極に迫つて、「君と云ひ園枝さんと云ひ、始終渝らぬ御好意は、僕決して忘れた事は有りませんよ！高潔な君の心事！それも元から崇敬して居たのだが、今この話を聞いて一層僕は……寧ろ僕自身の卑しい心事が愧しくらゐるです！實は那の小野も君の所でお世話になつてると云ふから、僕もそれなら安心して別れたのです。得心盡で別れて、お互に最う縁の切れた他人ではあるが、それでも有罪に、那の女の行末も余懸りです……（聲が途切れて）今後何うか見棄てずに保護して遣つて下さい、最後のお願として、是丈は切に僕から懇願して置きます！」

「宜しい！それは安心し給へ、園枝様ものも居るし、繁さんの事は決して心配は要らんからそれよりか君の事だが……ね、田舎なんかへ退だまんでも、何とか此の、方法が有りさうなものぢや無いか？」

「方法と云つて、東京に踏留る事ですか？」と

言ひながら首を掉つて、「色々然う言つて下さるのは有難いが、然し僕は、全く東京に居たく無いのですから——東京の那の劇しい生活の中に居るのは、苦痛なんですから……是までの僕と云ふものは、全で最う嵐の中に巻込まれて居るやうで、心に少しも——體だつて然うだが——平和と云ふものが少しも無かつた。僕は平和に渴して居るんです！田舎へ退込んで、自然でも楽しんで、何うか最う静な、穏かな、清い淡い生活を送りたいと思ふんです！」

「然うか！」間を置いてから速男は溜息を附いて言つた、「ちや、それも可からう、田舎へ退込んで暫く氣を抜くのも可いだらう。氣を抜いて氣を養つて、究り此の、疵傷を癒すんだね。で、傷が癒えて、最う一度再學を圖らうて氣でも出たら、忘れずに僕の所へ來給へ！君の爲めに兵糧と兵器とは、何時でも用意して置く！」

「有難う！感謝します。けれど、用意して置いて貰つても、恐く僕には無用でせう……」

速男は黙つて肩を聳かした、欽哉も亦無言になつて俛れる。話が途絶えると、深け行く夜寒が急に身に沁むやうで、キラ／＼と星影顔へる如き闇の野末を、遙に狐の啼く聲が爲る。

事務室の外の例の大型計が十一時四十分を指した時、其所のドアが開いて、一人の驛夫が伸を爲い／＼現れた。ブラットホオムの笠石を飛下りて、外套の襟を立てながら、コツ／＼線路傳ひに上手の闇へ失せたが、間も無く那邊のシグナルの赤い火が高く掲げられる。

「最う來ると見えるな、下りが。」と速男が腰掛を立つと、欽哉も立つて、「成程、最う來ますな。」

「速男君！」と欽哉の聲は感極に迫つて、「君と云ひ園枝さんと云ひ、始終渝らぬ御好意は、僕決して忘れた事は有りませんよ！高潔な君の心事！それも元から崇敬して居たのだが、今この話を聞いて一層僕は……寧ろ僕自身の卑しい心事が愧しくらゐるです！實は那の小野も君の所でお世話になつてると云ふから、僕もそれなら安心して別れたのです。得心盡で別れて、お互に最う縁の切れた他人ではあるが、それでも有罪に、那の女の行末も余懸りです……（聲が途切れて）今後何うか見棄てずに保護して遣つて下さい、最後のお願として、是丈は切に僕から懇願して置きます！」

「宜しい！それは安心し給へ、園枝様ものも居るし、繁さんの事は決して心配は要らんからそれよりか君の事だが……ね、田舎なんかへ退だまんでも、何とか此の、方法が有りさうなものぢや無いか？」

「方法と云つて、東京に踏留る事ですか？」と

「愈よお別か！」と投出すや、りに言ふ。
 「何うかまあ御健在で……園枝さんにも北小路君にも、君から宜しく被仰つて下さい。」
 「君も、おや健在でね——何うか然し、遠からん將來に又會ひたいものだ！」
 「いや、最うお目には懸れますまいよ！」
 角燈を點した二三の驛員と、茶と辨當の賣子も交つて這邊のプラットホオムに集つた。乗客は少ないが、それでも沈返つて居た構内が何と無く騒立つ。
 所へ、シグナルを揚げに行つた驛夫が歸つて来て、連男の姿を見ると、「貴方！ 最う東行も間が有りませんから、向ふへ被行つて下さい。」と注意する。
 見ると、何様東行の切符を切出して居て、向ふのプラットホオムには四五人の乗客。

「おや……園君！」と手を出して、睨り欽哉と握手を爲した。
 手を放し際に、「君は、田舎で老朽ちる人ぢや無いよ！」と囁いた連男は、其儘外套の頭巾をスツポリ冠つて、佩刀を鳴らしながら急足に橋の方へ立去る。
 欽哉は黙つて其の背後影を見送つたが、勢の無い太息を附いて、目を數瞬いた。
 間も無く西行の下り汽車は着いた。欽哉の乗たのは緩急車の直ぐ次で、其の一車又は他に連結したボギー式で無い代りには座席は透いて居る。向ふのプラットホオムに佇んで、凝と這箇を見詰めた連男の黒い姿が、終に全く見えなくなると、漸う欽哉も立掛つて居た窓を放れて、始めて室内を見渡した。天井裏の圓ランプが唯一つ、人顔も能くは分らぬほどの薄暗い中に、疎

に冷たい涙が頬を流れた。

十五

に七八人の乗客が何れも寝續く睡つて居る。汽車は次第に速度が加はつて、旋て眞暗な廣野へ出る。と、ドツと一吹き木枯を吹當て、窓のガラス戸が一時に鳴り響く。
 其の風の音の行方に遠く耳を澄した欽哉は、此時偶とゲエテの詩が胸に浮んで、其れを口の内に誦した。

Der du von dem Himmel bist,
 Alles Leid und Schmerzen stillst,
 Den der doppelt elend ist,
 Doppelt mit Erquickung füllst,
 Heh, ich bin des Treibens müdel
 Was soll all der Schmerz und Lust?
 Süsser Friede,
 Komm, ach komm in meine Brust!

シト／＼と霧雨の降る底寒い日曜日の後であつた。
 大久保も落合村に近い北小路の邸で、主の子爵と、夫人の園枝と、客の香浦大尉と三人で欽哉の噂が始つた。主も客も旅から歸つて始めて會つたのである。
 園枝夫人は銘撰物か何かの模倣な装で、手に編物を爲ながら黙つて話を聞いて居る。傍近く据ゑた室内の用盤車には、例の乳呑子が眞白な毛糸の頭巾の中から、クル／＼した目を那邊這邊物希し／＼に動かしながら、護謨細工の紙子を大人しく紙つて居る。三人が取圍んだ圓テーブルの眞中には、薩摩焼の中花瓶、月の何とか

と銘でも有りさうな、切花には勿體無いやうな大輪の白の球咲の菊が、質素な西洋室に是ばかり目覚しく挿されてある。其れは、主の唯一の道樂として邸内に栽培したもので、青香菊の薫ずるやうに冷く動いては話の網間を仄に匂ふ。骨な速男も暫く其れに心取られて居たが、匂丈では終に飽足らぬらしく、手近の苔を太い指先で弄り出した。園枝は眉を蹙めて見て居る。

と、その姿婆氣の多い男が、何時まで那樣田舎なんか退込んで居られるもんで……」と言ひながら一つ根つて、鼻へ持つて行つて、屹度又出て来る！」

「兄さん」と園枝が耐らなくなつて、「お舎なさいよ！ 花を取るのには。」

「然うか。」と今度は葉を巻つて、「何うせ、出て来ずには居られまいと思ふけれど……自分ぢや

何所までも最り、田舎の小學校の先生で果てる意りらしい。それだと實に惜しむべきもので、僕なんかもそりや、色々賤した覺もあるが、正直關ほどの男は些つと是で少ない。園枝が言ふやうな、豈か天才とか何とか那樣大した人物でも有るまいが、左に右く此の才物には違無い、田舎なんかで老朽ちる人間が違ふ！」

「然やうさ……」と北小路は受けて、「無論才物には違無い、又天才の素質も多少は有る、けれど、何しろ意志が弱い！ 今度だつて、それは當人の身になつたら随分打撃だつたらうが、それにしては意志の沮喪が餘りに甚しい！ だから、那儘若し田舎の小學校教師らゐるで老朽ちて了ふやうだつたら、それは實に惜しむべきだが、然し、平和な生活を渴望すると云ふのも、恐く其れは一時の反動に過ぎないだらう。漸う

三十になつたか成らぬで、是から未だ永い生涯を、那様陰者めいた境遇に凝として居られる男では無い。君の言ふ通り、東京へ又出て来るか、で無くとも、何か又始めずには居られまい……が、何うも然し、那の意志の弱いのが那の男の生涯の祟だ！ 意志の弱い、執着心の足りない、物事に熱中しても、直き冷めて了ふやうな、那いふ性質では、設ひ何を始めて見た所で、到底得る所無しに終るのは餘儀無いだらう！」

「と言ふと、究り那の男は、何を爲ても成功しない……？」

「先つね、難しいだらう。那いふ性質に生れたのも天分なら、恐く今後も、其れが那の男の一生を貫く餘儀無い運命だらう！ 那丈の才を持つて、それで何も成し得ぬ——強ち事業の上の功績には限らない、例へば小野との關係にした

つて然うだが、總てが那れで。一體が才物である丈に、並の者のやうに正直に一本道を辿つては居られない、それに年だつて若いし、是から未だ一生の間には色々な道を歩くだらうが歩いても那の男の後には何にも残らぬ、迹の残るほどに踏まないのだ、いや、踏まないのでは無い踏めないのだ。醉生夢死に甘する徒なら論外だけれど、那の男は然うでは無い、何等か成したい、何物か残さうと云ふ念が燃えるやうに有つて、胸には始終其の爲めに火を焚いて居るのだが、其の火が直に消えて了ふ、天賦の燃料が乏しく生れたのだから氣毒だ！」

速男は黙つて了つた。夫の話に心取られて、編物の方も留守になつて居た園枝は、氣が付いたやうに又針を動かす。話に途絶えて、黥の中の子が舌子を舐る音のみ耳立つ。

「おや、何だらうかしと速男が又口を切つて、小野との関係も然うだとすると、おや、今度那麽工合で別れたのも、彌張此の、關の方で熱が冷めたからなんだらうか？」

「然うとも！ 熱は速うに最り冷めて居たのだらう。今度別れたに就いて、關が大船で君に談した、其と同じやうな事を園枝も彌張小野から聞いたさうで。シヨツペンハワリーの哲學か何か彌張しい理窟もあつて、小野にも能く分らないけれど、左に右く別れるのは得心で別れたと云ふ事だ。尤も其時は、小野も成程と聞いたのださうだが、餘り漠とした理窟で、後になつて一向頭に残つて居ないやうな口振だつて——ね、然うだね？ 園枝。」

「ええ。」
「それは、残らないのが當前で……那の男には

のだから、智的になれば成るほど稀薄になるのが自然の勢で、何も關のみに限つた弊では無い、現代一般の其れが趨向なのだ！」
園枝は何時か又編物を歇めて了つた。孤子の音が爲なくなつたと思つたら、子はスヤ／＼睡懸けて居る。

「では、現代一般の趨向が然うして智的には走り走るから、情の方の發達は鈍いかと云ふに、強ち然うでも無い。世界近世の文學藝術」と話を取んだ方へ逸れて、「有ゆる方面に情の産物の非常に進歩して居るのでも分るが……關にしたつて、那の男は決して情の乏しい人間では無い、けれど、情が始終智と衝突して居る、其の衝突を調節する意志の力——繰返し言ふやうだが、其の意志の力が足りないから、それで唯徒らに衝突に苦しめられては煩悶する。關の煩悶は、

何處までも然りして理窟が附纏ふのだ。理窟も好い、理窟に傾く丈其智的なので——理智を求むるに熱心で、何事も合理的で無ければ満足せぬ——立派な事で、決して其れを悪いとは言はぬが、然し、合理的であるから何丈其れが効果があるだらう？ 例へば今度の事でも、然ういふ形而上の解釋のみで以て、二人は果して満足し得られたらうか？ 第一關は、其の哲理を信じて行つたらうか？ 哲理のみで人は救はれるものではない、知ると云ふ事以上に信ずると云ふ事が大事だ！ 信は力だ——那の男の爲る事には、何うも其の信仰の力が見えない！ 随つて熱誠の人を動かすものが無い！」と言切つたが、少しく考へて、「いや、其れを那の男に望むのは無理かも知れないので。信仰とか熱誠とか云ふものは、情の言はゞ醇醱されたものな

旋て又時代の煩悶とも言ひ得られるので……少くとも、現代青年の一般の傾向が、那の男によつて代表されて居るやうに思ふ。我々現代の青年は、歐洲文明の新しい學問や藝術、乃至宗教などに多少皆涵養されて居るので、知識に對する熱心な渴望とか、或ひは感情の微妙な點とか然ういふ智や情の上に於て、到底老人や先輩の解し得られない發達を爲て居る。其代り、武士道や儒教主義で育てられた老人先輩のやうに、意志の修養と云ふものが缺けて居る。からして智情にのみ偏する結果は、自然懷疑的で、且つ感情的で、其弊は活動の精神に乏しい、何事にも實行の勇氣が伴はない。薄志弱行とか、意氣銷沈とか、我々青年が毎も老人先輩から攻撃されるのも此點で、然し、日本の文明は未だ若い、所謂青年時代である！ 是から新文明を完成し

やうと云ふには、今の内に充分新趣味新思想を養つて置く必要がある。今から習情の上の弊ばかり説いて——それは意志の修養も大切ではあるが、其爲めに折角發達し懸けた習情の方を阻止するやうなことがあつては、由々しき大事である！意志ばかりに重きを置いて、習情の上の修養を缺いた、今の老人先輩が建設した明治の過去の舊文明には、現に我々も其の弊に堪へられなくて居るでは無いか！

速男は身轉もせずに凝と聞いて居たが、此時漸と肩で息を爲て、無上に口髯を引張り始めた。

「しますと、那の人は」と園枝が始めて口を出して、「明治の新時代の……何と言ひますか、究り代表者ですね？」

「然うさね、代表者とも言へやうし、時代の風

潮が生んだ時代の子、言換へれば、舊文明から新文明に移る過渡時代の犠牲者だらう。」

丁度話も一切になつた所へ、白金巾の前垂を掛けた大年増の伸働が、些つと言つて園枝を呼びに來た。で、能く睡入つた籃の子を密と其れに抱かせて、一緒に園枝は出て行く。

後は北小路と速男の差向ひになつて、今度は繁の噂が始つた。

速男が「妹から話したらうが、今度支那人の女學校が滿洲に立つさうで、君の叔父さんの公爵が、女教師の此の、人選を依頼された事が新聞に出たさうだ、僕は氣が付かんが……それで、小野が是非自分を遣つて貰ひたいから、君から一つ公爵に頼んでくれつて事だが、何うだらう？」

「可いだらう。」と北小路は答へて、「雇人とも付

かず、と云つて客でも無いし、那して何時まで置いて居ても爲やうが有るまい。自分で思立つたのは感心だから、其れは是非決行させるとして、僕から能く叔父に話して採用させやう。」

「だが……大丈夫だらうか？内地なら左に右、滿洲まで踏出すつて事は、女にや些つと奮發過ぎるからね。關と那慶事になつたものだから、一時の此の、氣紛れに思立つて見たんぢや無からうか？」

「それを僕に聞いたつて分らない……だが、園枝なぞから聞いた様子では、那の女も以前とは違つて、存外肚が出来て居るらしいから、最う大丈夫だらう！」

「然うだらうか……」

「却て關なぞよりは、今日では那の女の方が聡りして居るだらう！」と固く信するものらしく、

「突り女丈に、骨肉の冷遇や、郷黨の惡評などを非常に深く感ずるし、それに男と違つて、今日まで那して遣つて來た常人の心持になつたら、なか／＼一通りならぬ辛抱だつたらう。だから意志も自然其の間に鍛へられたらうし、那なると却て女の方が強いものだ！」

「うむ、そりや成程、大きに然うだらう！」と始めて得心の行つたやうに速男も頷く。して見ると——又關の話に還るが——其の意志でものも鍛鍊に由つちや何うにでもなるので？關の意志の弱いのも、未だ此の、苦勞が足りないからかも知れん。」

「然う、或ひは然うかも知れない……お、明るくなつて來た！」と椅子を立つて、北小路は西窓のカアテンを絞りながら、「何にしても、惜しい男には違無いのだから、眞面目に何うか苦

勢を積んで、精神の統一した、所謂人格の全き人となつて、而して時代の犠牲者で無く時代の勝利者となつて欲しいものだ！

速男は大きく又頷いたが、徐ら椅子を立つと、同じ窓へ行つて外を眺めた。
雨は霽つたが、天は未だ一面に曇つて居る。畔の所々、枯葉の落盡した木の梢の向ふに、低く雲間を洩る、黄金色の夕日が斜に雑木林を射つて——淡く水蒸氣の打煙つた、水田や枯野や大根畑や、爪先上りになつた其の果の一簇、黄色い雑木林の雨に濡れたのが火花の散るやうに輝いて居る。と、其の林の蔭にチラ／＼水の光るのが見えて、黒い鳥の影が二三羽啼いて下りた。其の聲！ 隨に鴨の聲であつた——武蔵野へ冬の来る先觸なのである。
「あゝ、最う冬だ！」と北小路が言つた。

十六

「冬だ！」と速男も言つたが、「是から田舎は寂しくなるばかりだらう！ 關は何うして暮らすか知ら？」

「さあ……設ひ天才で無いまでも、關は左に右く詩人だ！ 長の冬の夜、獨り寂しく冥想する、然ういふ時に始めて那の男の眞の詩が成る！」
「遅くなりました、さあ、何うぞ被來つて下さい。」と園枝がドアを開けて呼びに来た。
で、北小路が「晚餐の支度が出来たさうだから、噂の出た次手に、關の爲めに一つ、盃を擧げて遣らうでは無いか。」
主を先に、速男も園枝も一緒に二階を下りて行つた。開放した西窓から夕日が薄り射込んでテエブルの上の菊が獨り匂つて居る。

満都装を褒らして、萬歳の聲湧くが如き夜、新橋ステエションに御許と永久の別を相告げ候節、我等の思出多き過去の歴史も、是ぞ最後のページのヒロなる旨申上げ候ひき。然るに突然たる孤影を一先づ横須賀行の列車に托して、都門を離るゝ事僅々二時間ならざるに、縁くりなくも大船のステエションにて香浦速男君と出會仕候。委細の事どもは何れ速男君より御聞及びと存候ふが、木枯寒きプラットホオムに汽車を待つ間の立話如何に感慨多く候ひしよ。
速男君との會合も、決して我等が過去の歴史のページ外に逸すべき性質のものにはあらず最後のページに更に一ページを増補せしものにや候ふべき。其際にも小生は、新橋の御別

が必ずしもENTJにあらざるを相覺り候ひしが然りとて、恠る出来事の次いで又増補さるべしとは争で思奇り申すべき、圖り難きは實に人間の事に候。
大船にて速男君と別れ、更に西行の汽車を乗纏ぎ、尾張津島に相着き候ふは翌日午前、實家の兄が如何なる態度を以て小生を相迎へ候ふかは、御許の御推察に任せ、郷里より五里ばかり奥に小生の實母の弟、淨土寺の住職を致し、妻子も係累も無く、至極暢氣に暮らし居り候ふまゝ、其の伯父を頼りて、露郷の翌翌日より山僧の生活を試み候。来て見れば浮世なりけりの感は、其所にも亦免れず、一週間ばかりにて再び津島へ引揚げ候。
恰も引揚げし其朝、大村の養家より書面に着、小生の戸籍に就いて行運生ぜし爲め、雜錄

の手續相運び難く迷惑の旨、兄宛にて申参り候。無論書面にて相分る事なれど急に思立ちて、其日の午後小生躬ら養家へ出向く事に致候。御承知の通り、今更顔出し出来得べき義理にはあらぬを、好奇か、未練か、御許には小生の此の思立を何と思召さるゝや。あゝ、是ぞ小生が常に躬ら苦しめられつゝある心の蟲の怪き蠢きに候。恥を忍び、不面目を冒して、離縁されし養家へ何の爲めに出向きしぞ、憐れき自尊心の満足、唯其れのみ候。離縁は固より得心の事なり。随つて許嫁の約の消滅したるは申すまでも無く、佐藤にまされ、誰にまれ、新に婿養子を迎ふるも是亦至當の儀、小生に何の異存か有之べき。有るべき道理も無く、有ればとて效無き事に候。然り、何の效無き事に候。然れど、此儘養家の者よ

り永く小生と云ふものゝ忘れ去らるゝは、無理かは知らねど、小生には如何にも本意無く存じられ候。一度びは許嫁の約まで結ばれし其心に、何等の影も留めで、諭へば手に着きたる淡墨の拭去らるゝやうに消ゆるは憐し。努め未練にはあらねど養家に對する是までの不義理、別けても許嫁の約に背きし小生の不人情は、小生躬ら忘れ難き思出の一つに候。然れば、折々の心苦しき其の思出も、思出らるゝ先方には何の思出無くて、單に小生のみ徒らに苦しき思出を繰返さざる可らずと爲れば、小生の自尊心は堪へ難き空虚も覺ゆるに候。固より佐藤と云ふ新夫も定まりし今日許嫁の心の小生に残れると否とは問ふ所にあらず。小生は唯小生と云ふものを、先方の記憶に新ならしめんとてこそ然は思立ち候

へ。畢竟其は、小生の爲めに傷けられたる繊弱き女の心の、僅に癒えんとする傷痕に、更に新しき痛を與へんとする思立に外ならざるなり。あゝ、何ぞ小生の残忍なる。津島を出發せしは午後二時、汽車にて三州豊橋驛まで参り、それより一里餘りの田舎道を徒歩せざる可らず、大村の手前の豊川堤へ相出で候ふ時には、既に日も暮れ、月も差昇り候。爰の渡場には、小生佐藤と共に豊橋の中學へ日々通校せし頃より、渡船を棹せる豊の爺有之、今も同じ爺にて、耳の遠さも昔に變らねど、あゝ、變れるは小生の身の上、多少の感無き能はず候。霜のやうなる月光を浴びて、寒江聲無き舟中に、行いて返らぬ此水の流れて去りし我が往時を思へば、涙漫ろに差含まれ候ひき。

さて、餘事のみ冗々しく申述べ候ひしが、速男君との會合に一度び増補されし最後のページに、更に又増補すべき出来事の次いで起りし、其の出来事を今や申上ぐべく候。あゝ、新橋のお別を以つて譯無くお別と斷ぜし小生の輕卒さよ。御許も此の悲痛なるカタストロフィを聞き給はゞ、人の世の眞の落日の、終に茲に至るを止むべからざるかを感じ給ふなるべし。小生渡船に乘込みし時より心付きし事なるが川向ふの大村の堤を、慌忙しげなる提灯の影一つ行き二つ行き、何か事有りげに相見え候。船頭の話に由れば、今宵關の家の婚儀なる由、始めて聞きたる小生の心は有聲に混亂仕候。さて思懸無き所へ來合せしものかな、其れと知らねば是非無し、知つて故ら祝儀の席を

白けせんも餘りに心無きまゝ、一度びは舟を返さんかとも存ぜしが、大村には他に一泊すべき心當りの家も無きにあらねば、左も右も向ふまで相渡り候。渡りて始めて知りたる其の提燈の火影は、愛でたき祝儀の火にはあらで、實に悲むべきカタストロフイを照らす禍の影にて候しよ。

舟を下りて、堤を越ゆれば直ちに養家の背戸へ出づべき近道に候へど、今宵は他に一泊すべき心組にて、洗に沿ひ、堤を三町ばかりも参り候ふ折から、突然川下の方より、人の呼はる聲銃く耳に入り候。何事と怪しむ暇も無之、小生は聲を便りに駈着け候へば、聲は堤の下より相聞え、其所の汀に提燈の火影も一つ相見え候。直ちに堤を降りて、一目其の光景を見たる小生は、全身の血も忽ち冷却

仕候。あゝ、如何なる光景の其所に現出されしと思召さるや、村人と思しき一人の百姓が、今水より引き揚げしばかりなる若き女の盛装の屍體、其は何人の屍體と思召さるや。あゝ、紛ふ方無き養家のお房の死したるにて候。

屍體を引揚げし百姓は、小生の参合せしを幸ひ見張を托し置きて、直ちに養家へ馳行き候。後には小生と小生の許嫁を敢て小生のと言ふ、恠く言ふ事を今御許も尤め給ふまじしのお房と唯二人、其のお房は芳魂既に去つて爰に親しく小生の有る事も恐くは知らざるべし。あゝ、何を憐み、何の爲めにか死せる、幽冥遠く隔て、知るに由無しとは云へ、小生にして其死を解し遣らずば誰かは解し申すべき。見れば、少し離れし落葉樹の根方に、行儀好

く脱ぎ揃へし女の穿物と、其の傍に櫛笄など頭の物を襪紙に包みたるのが有之、別に書置らしき物は見當らねど、正しく覺悟の入水とこそ存じ候へ。然かも入水して可成時過ぎたるものらしく、最早や如何なる呼吸法以上の療法も施せばとて、蘇生のほど思ひも寄らず。

全身水に浸りて髪も汐垂れたるものから、今宵の祝儀にとて取揚げたる高髻は崩れもやらず、僅に前髪のみが蠟のやうなる額に亂れ懸り居り候。儀式迫りて漸く抜け出せしものと相見え、身には白の無垢、あゝ、死者躬らは恐く死出の曠着にとて身支度致せしものにや候ふべき。小生も胸塞りて、思はず屍體に取纏り候。お房の玉緒を呑みたる其の邊は流も早く、汀

に近き瀬音の咽ぶが如き外には、滿江寂として、荒涼たる夜天の霜、地上の月、此情此景、あゝ、何時の世にか忘れ候ふべき。水に濡れ月に光りて白無垢氷の如く、純なる處女の聖なる死を装へばか、皎として人界のものとも覺えず候。面容は稍變りたれ、石膏の如き其の死骸を打成れば、死者の生前の血は、今や小生の血管を熱湯の如く傳はつて、暗き冷き小生の墳墓の如き胸底に、一味の靈火を點せらるゝを相覺え候。堅く閉ぢたる不言の其の唇に何をか語れる、あゝ、黙して戀し、黙して死す。戀の意義とや、戀の目的とや、今更思へば愚なる饒舌に候ひき、戀は知識以上、論議以上に絶したる人間の神祕と始めて小生も覺り申候。あゝ、誠の戀は恠くの如きものに候。是

に何の哲理や有之へき、只唯慙くの如きものにて候。あゝ、死を以て戀せし死者の戀には小生も亦死を以て酬ゆるより外無之、所詮は惜しからぬ此身と此命と、亡き許嫁の情に殉ぜんとこそ思定め候へ。一先づ實家に歸りて亡き後の事ども心静かに處理候上は、重ねて小生の姿を此世に見る事も有るまじく候。さて、小生の見張りし許嫁の屍體は、旋て養家の人々に由りて家へ運ばれ候。其後の事どもは御許の御推察に任せ、唯一事申上げたきは、怨恨、憤怒、憎悪、猜疑など、一切の悪しき感情も死の前には悉く融和されて、人は皆美しき哀悼の涙に相同化する事に候。只今養母を始め佐藤、其他の人々と柩前に通夜をなしつつ、是を認め候。二三日遅れて郵送可致。然れば此の書面の御許に相達し候頃に

は、小生は恐く此世に有るまじと存候、小生も亦此世に有るべしとは望まず候。最後に、御許の祝福を祈りて、遙に永別の辭を呈候、以上。

繁様

欽哉拜

讀終つて、其儘繁は手紙の上に俯したまふ、何時までも何時までも身動しなかつたが……ああ然う！ 自分は是から北小路の紹介状を持つて、麹町の公爵家へ行かねばならぬ時刻と氣が付いて、漸く涙に濡れた其の顔を拭ふと、長い手紙をサラ／＼と巻收める。

「本當に死ぬ意りなんだらうか？」と考へながら、机の下に金唐櫃の持古した手箱の中へ、其の手紙を藏はうと爲て、偶と二折になつた野引

の西洋紙を取揚げた。開いて見ると、今から丁度六年前『顯世』の淨寫を頼まれた其時の欽哉の自筆の詩稿で、何の花か、枯れてボロ／＼になつた茶色の花片が、大事さうに挿んである。何ういふ記念の爲めに這麼花を保存して置いたものか、些つとは思出せなかつたが、暫く考へてから、其れはヒヤシンス——悲哀を意味する花であつたと心付く。

と、「那の人は、死ねる人ぢや無い！」と今度は然う思つて、繁は其の枯れた花を窓の外へ捨て、立つた。

許可番號已資紙規第九五號・東京府規格外許可

昭和十六年十二月十日印刷
昭和十六年十二月十五日發行

366



發行所 東京市日本橋區
通三丁目八番地
配給元 東京市神田區
淡路町二丁目九番地

春陽堂文庫出版株式會社
日本出版配給株式會社

著者	小栗 風葉
發行者	東京市日本橋區通三丁目八番地 松浦 積
印刷者	東京市本郷區佛町三十六番地 龜谷 良一
印刷所	東京市本郷區廣砂町三十六番地 日東印刷株式會社

春陽堂文庫 大衆小説篇

〔青春〕 後篇

(定價 金五拾五錢)

春陽堂文庫 目錄進見

月刊ユーモア・クラブ 五十錢

終

